
Roman holiday

たるたるきのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R o m a n h o l i d a y

【Nコード】

N 2 1 5 4 L

【作者名】

たるたるきのこ

【あらすじ】

この世界はいつたいなんだ？

元の世界からひょんなことで異世界へ

ファンタジー世界での日々！

What? (前書き)

拙い文ですががんばります

思いつきで書くのでいろいろ設定が…… (笑)

どうぞよろしくお願いします

What?

俺はまだよくわからない

何故この世界に来てしまったのかが

元居た世界では俺は普通の高校生だった

気さくな友達

口うるさい先生

家に帰れば、いつも優しい笑顔で出迎えてくれた母

頼りになる無口な父

少し生意気な妹

そんな当たり前だったことも今では思い出になっていた

今の目の前の光景はどうなのかとという

くるつと見渡せば、立派な彫刻入りの柱、赤いカーペット、どこかい扉や急ぎ足のメイドさん達が目に入る

ふと上を見上げれば、まばゆく輝くシャンデリア、天使などが描かれていたとても高い天井

そう

今俺は豪華な屋敷にいる

神田

さて、こつちの世界に来る前の事を説明しないとな

よくよく考えるとこつちの世界に来てしまった原因は一人の女の子に因るものなのかも俺は思う……

今でもやたら鮮明に覚えてる

学校帰りに友達といつものように寄り道していた俺

その日は商店街で軽い食べ歩きをしていた

先に言つとくが俺は二ートじゃないぞ

ちゃんと休日だけが引つ越しのバイトをしていた

まあそんなこんなで帰るときに信号にひっかった

その時、俺ともう一人神田って奴と二人で帰ってたんだ

神田は一言で説明するなら、「喋らなければ、イケメン」これは皆が認める神田の形容詞だ

ちなみに神田は家も隣ですっと幼なじみ

いわゆる腐れ縁ってやつだ

で、その神田が「やべえw向こうの歩道にめっさかわいい女の子がいるわw」って俺の肩を叩きながら騒ぎ始めた

そして神田は「逝ってくるw」と言って向こう側の歩道へ走っていった

その時はまだ赤信号だったが車は遠くを走っていた

向こうで神田が頑張ってるのを見ているうちに青信号になったので俺も向こうへ

話しているところに入っていくのは無粋なので俺はガードレールに座って待っていた

すると女の子が俺のところへ来て彼女のポケットから何かを取り出し、俺の制服の胸ポケットに入れて一つ会釈して立ち去った

強引な理屈だが、「目的は始めから俺だった」それが彼女に対する第一印象だった

神田は何を受け取ったのかしつこく聞いてきたが、答えないのがいつもの事なのでスルー

そして帰宅

神田の部屋と俺の部屋は隣合わせになっている

これがかわいい女の子だったらと恨むが仕方ない

そしていつものように互いに窓を開けてトークタイム

少し経って神田が今日もらったモノが何だったのか聞いてきた

しかしまだ見てなかったので神田と一緒に見ることに

それは一枚の紙だった

アドレスと電話番号が書いてある小さなメモ紙。

神田はあの女の子の連絡先だとはしゃいでたが、さすがに見ず知らずの人にいきなり自分の連絡先を渡すのは怪しいので俺は連絡しなかった

しかし神田は連絡したいというので紙を渡した

そして次の日から神田の様子がおかしくなった

いや元からおかしいが、何というかキモいに拍車がかかった

皆そう思っただろうな

神田に直接聞いてみたところ「フッ……聞いて驚け。実は昨日の女の子が彼女になりましたwY a h o o!」と立ち上がりながら大声で

それを聞いたクラスの雰囲気は、ざわ……ざわ……になったのを覚えてる

神田のポジション「イケメンだけど彼女無し」が今見事に変わったからだ

まだホントに彼女がいると信じたわけでは無い

なので家に帰ったらホントかどうか聞いてみることにした

窓

学校が終わり俺は家へ帰り、神田が帰って来るのを待っていた

しかしなかなか来ないので俺はパソコンに電源を入れ、ネットサーフィンタイム

いつの間にか7時を過ぎたあたりになり、やっと神田は帰って来た

俺はパソコンに目をやりながら耳だけ神田の方へ意識を置いていた

すると神田の様子がいつもとは違う事に気づいた

いつも俺と神田は部屋に着くとまず窓を開ける

そして話をする

神田が窓を開けたところまではよかった

しかし、なぜか神田以外の声が聞こえてきた

俺は慌てて神田の部屋を覗く

するとそこにはあの女の子がいた

神田はニタニタしながら俺にこう言い放った

神「おや、居たのか！ハハハ、彼女うちに来たいってきかなくてさ
wまあ君は気にせずネットサーフィンしてたまえww」

あのわざとらしい言い方をする顔をおもいつきりぶん殴りたかった
.....

神田と長年一緒にいて一番うざかった.....

そんなこんなであの女の子が神田の彼女だってことは証明された訳だ
チクシヨウ

その日の夜、家の近くのコンビニに行って買い物済ませて帰ってくる途中にある歩道橋にあの女の子が一人でいた

神田は自分の彼女を送ってやりもしないのかと頭の中で責めながら歩道橋の階段を駆け上がり、女の子の元へ

「……………どうした？神田は送ってくれないのか？」

そう尋ねると返事はこなかったが彼女はこちらを向いた

俺は歩道橋によつ掛かった

「……………ん？」

よくみると彼女の唇がわずかに動いてることに気づいた

そして彼女は「……………この世界は好き？」と俺に呟いた

いや、彼女の視線は俺とは合っていないから俺に対して言ったことなのかはわからないがここにいるのは俺と彼女の二人なので俺に対してとっていいだろう、ということであれは「どちらかといえば……………退屈かな」と答えた

すると今度は「……………違う世界見たい？」と呟いた

俺にはその言葉が何を意味してるのかその時はわからなかった

そして彼女は何も言わず立ち去り闇に消えた

次の日の学校に神田は来なかった

昨日、あの後家に帰った時には神田の部屋の窓は閉められ電気も消えていた

あの時は初めての彼女が家に来たからはしゃぎすぎて疲れて寝てしまったとは思ってなかったが、熱出しても学校に来ていたあの神田が来てないのはおかしい

それに昨日の彼女の謎の言動

すこし背中の毛が立つ感覚を俺は覚えた

入口

学校が終わり俺は隣にある神田の家へ寄ってから自分の部屋へ

神田の母親が言うには今日神田はいつも通り学校へ行ったらしい

となると途中で気が変わったのかもしれない

しかし神田の母親が言った「……あの子の彼女が迎えに来て出て行
ったわよ？」がかなり気になる

彼女が現れてからいろいろ変わっている

神田に何も無いと祈るしかない

……まあ考えすぎだろうが

夜、神田の部屋に電気はつかなかった

それから三日間神田は学校へ来なかった

俺は家に帰ってから少し考えた

いったい神田はどうしたのか…と

そして俺はあることに気づいた

あの紙

そう、彼女のアドレスと電話番号が書いてあるあの紙の存在に

俺は机の引き出しから紙を取出した

よく捨てなかったと自分で自分を褒めた

そしてアドレスの下に書いてある電話番号に電話をした

.....ッ.....ッ.....プルルル.....

電話の呼び出し音が数回鳴り、電話が通じた

？「.....はい」

声の主は確かに彼女のもだった

「……………正直に答えてくれ。神田を……………どうした」

そのとき質問に彼女は答えなかった

そしてまたあの歩道橋で会うということになった

歩道橋に着き、俺は周りを見渡した

まだ彼女の姿は見当たらなかった

俺の下を走り去っていく車に少しの間目を落とし、また周りを見渡そうと身体をひねった瞬間、彼女の姿が俺の前にいるのが目に入った

「……………来たか……………で、神田は？」

俺は彼女に問いたが彼女はまた俺の質問を無視して「……………この世界は好きか？」と呟いた

「まず俺の質問に答えろ！それに何言ってるのか訳わかんねえよ！」俺はついつい怒鳴ってしまった

彼女は「彼は元に戻す」と言い、さらにこう続けた「……………貴方は選ばれた人間……………違う世界を見たいか？」

話の急展開に焦る俺

「なんなんだ一体……………お前、頭いかれてんのか？」

非現実的発言に戸惑いを隠せない

彼女は質問を変えろと言い、俺にナイフのような鋭利な何かを首に突き付けこう言った

「貴方は近いうちに、死ぬ。」

「……………なんの冗談だよ……………っ」

「本当の事よ。このまま帰り、近いうちに死ぬか、今私に殺されるか、違う世界へ渡るか選べなさい……………」

「え、選ばれたって……………誰に選ばれたんだよ……………っ!」

「私によ」

「……………は!？」

「だから、私が貴方を私の本来いる世界へ連れてってあげると言っているのよ」

「……………なんで俺……………なんだよ……………？」

「貴方には不思議な力を感じるからよ……………貴方はこの世界にいる人間というより私のいる世界の人間に近い雰囲気を感じる」

彼女は俺より頭一個分くらい小さいのだが言動と雰囲気で俺より大きく感じ、俺は気圧され力が入らない

「さて、どうするのだ？」

「……………離してくれ。少し……………考える」

そう告げると彼女は鋭利な何かを首から離し、俺は自由になった

「……………なぜお前は俺が死ぬことを知っているんだ」

「私の世界の人間ならこちらの世界に来たらそれくらい普通にわかるわ」

「……………?」

俺はよくわからない発言に首を傾げる

「そうね……………簡単に言つと私側の世界の、私がいる国とは別の国の暗殺者によって殺される」

「…………俺が殺されなきゃならない理由なんかあるのかよっ!？」

「それはまだ知らなくていいこと……………いや、教えるべきか…………」
彼女は少し考えこんでから俺の顔を見つめ、こう告げた

「貴方は…………私側の世界で重要な人物になりうる人間なのよ」

俺は何かいろいろ省略して話してる感じをかなり受けた

（つか未来の重要人物になり暗殺者を送られるって、どこぞのタ
ーミネーターの話じゃねえか）

「つか……………どちらにしろ俺は死ぬ。だから否応なしにお前の世
界に行かなきゃいけないんだろ!」

「まあ…………そうなるな。どうせ死ぬなら少しは人とは違う体験して

から死んだほうがいいだろう？ いわば私は優しい案内人てこと」

(くっ……………なにが優しい案内人だ)

「……………わかったよ。行くよ。そっちの世界とやらに」そういった途端彼女は鋭利なあれを俺の心臓に刺した

(……………いっ……………てえ……………)

「安心しろ。ちゃ……………と……………記憶は……………しとい……………やる……………」

熱い何かが流れ出る感じがした

それに俺の視界はぼやけ、彼女の言葉も上手く聞き取れない

そしてそのまま俺は歩道橋の上に倒れた

次に気がついた時、俺が初めて見た景色……………広い部屋に一つのベ
ット

そしてそのベットに横たわっていた俺

（……………ん？まてよ。よく思い返すと俺がこっち来た原因
は彼女そのものじゃないか。きつといきなりすぎたから混乱してた
だけだな、うん。しかもかなり理不尽だったし、うん）

さて、ざっとまあこんな感じだ

一体俺これからどうなるんだろう……………

目覚め（前書き）

この辺から会話等が結構入ってきます

会話中に「w」等が出現しますが小説らしくないと言わないで下さい
m (——) m 笑

留意点

基本的に（ ）はその人のところの中の言葉等です

「 や（ ）の左隣に書いてあるのは発言者の名前の始め一文字です

始め一文字が重なる場合は名前全部のときもあります

また、今まで一人称でしたがこれからは三人称視点も多々入ってきます

めんどくさい表現かと思われませんがそこも楽しんでいただけたらと思います。

ではお楽しみ下さい（＾　＾）

目覚め

目覚めた俺はベッドから降り、ベッドと窓しかないこの部屋を一周した

窓から外を覗くとそこには、「今までいた世界とは別の世界」というたのが本当の話として受け入れられるような景色が広がっていた
整えられた芝生で覆われている庭と呼べないくらい広い庭がまず目に入る

その庭から少しのところには、いままで公園でみたことのある噴水とは格が違う豪華すぎる噴水

噴水を囲むように歩道が作られていて、噴水を楽しむためのベンチもある

(ど……………どういつこっちゃ……………)

そして俺は体の向きを90度反転して部屋の大きな扉の前へ行き、開けた

すると、はたしてそこには立派な彫刻入りの柱、赤いカーペット、どでかい扉や急ぎ足のメイドさん達が目に入る

ふと上を見上げれば、まばゆく輝くシャンデリア、天使などが描かれていたとても高い天井

そう

今俺は豪華な屋敷にいる

(す、すげえ……………！)

開いた口が閉まらないとはこのことだと言いたくなるような、そんな見事なアホ顔で立ち尽くす

好奇心に攪られ、この豪華な屋敷を探索したくなった俺

そのとき、俺を見つけて近いてきた女性が

その女性は身長160後半くらいでとてもスタイルがよろしく（ボンキュッボンの意味で）、肩をすこし超す金に近い茶髪で軽く毛先が巻いてあり、正に容姿端麗の言葉が似合う人だった

「あ、あの……ここはどこでしょうか？」

？「ん？……ハハッ、そうかそうか」

初対面の美女にクスツと笑われた俺は何故がよくわからないが頬を朱らめて照れる

？「私かわからないのも無理ないな。何せ向こうの世界では妹キヤラというのか？そんな容姿だったからなー」

笑いながら言っている美女

しかし俺は「向こうの世界」という言葉を聞き逃さなかった

「まさかお前……っ！」

「御明察」

鼻歌まじりの明るい口調のこの美女は、あの女の子

つまり神田の彼女だった

「ちょっと待てっ、いくらなんでも見た目のギャップが激し……」

？「ああ、あれはすんなり接触するために容姿を変えてたのよ」

（うん。いやまあ……これはこれで目の保養になるが……／＼／＼）

？「……ちょっと、なあゝにいらやしい目で見てるの………ようっ
！」

鈍い音を鳴らしながら尻をおもいつきり蹴られた俺

（……………っ……………はうあっ……………！！！！！！）

声に成らない声をあげる

マ「そうそう、私の名はマリー・ルチアーノ。皆はマリーって呼んでるわ」

「……お、俺は槇野^{まきの} 奏^{かなで}」

まだ痛む尻を摩りながら自己紹介を済ませた

マ「よろしくね、奏」

新たな生活

マ「さてと……ついて来て、奏」

マリーの後について行く奏

(にしても………広いなあ)

元の世界では一度も来たことが無い豪華な屋敷に、ただただ驚嘆するばかりの様子

そして少し移動したところでマリーが立ち止まる

マ「奏？入るわよ？」

屋敷の立派さに目を奪われていたからか、いつの間にかゆっくりと歩いていたらしくマリーとだいぶ距離が離れていた

奏は急いでマリーの元へ行き、マリーは扉を開け中へ

この部屋はさっき奏がいた部屋より少し広く、ぬいぐるみや内装的にマリーの部屋のような

マ「その辺に適当に座って。なんか食事頼んで来るから待ってて」

マリーは部屋から出て行き一人きりになった奏

(……………何と云うか、とんでもない世界に来てしまったなあ)

そしてマリーがいないのをいいことに部屋を探索し始めた奏

（悪趣味だな俺…………まあここでやらぬは漢の恥つてもんよ！）

まず手をつけたのがクローゼットだった

（にしてもクローゼットも立派だなーこりゃ）

クローゼットの広さも一般的な広さの三倍はあるだろう横幅

そして豪華な服がたくさん掛けてある

（この引き出しはなんだろ）

腰を下ろし、取っ手に手をかけ、引く

(これは……………っ！！)

そこにあつたのはマリーのとおぼしき、いや、マリーのと断定して
よい下着が並んでいた

そして奏はパンツを一つ取り出した

(これは……………猫ちゃんの刺繍……………)

ゴクリと唾を飲む音が耳に入る

そして奏の心では今、激しい葛藤が起きていた

この不純な行いに対する抵抗心、思春期の男だから仕方の無い興味
心、マリーが何歳なのかを知りたい探求心)

この様々な思いが奏の頭を過ぎる

今、一応イケメンである奏も傍からみたら猫ちゃんパンツを手にとり半分にやけ顔の、明らかに下着泥棒か変態あたりにしか見えない
そしてそこにありきたりと言わんばかりのタイミングでマリーが戻ってきた

マ「奏〴〵 食事持つ……………」

トレイを持ったまま固まるマリー

奏もまた、固まる

暫く無言で固まる二人

そしてこの異様な世界を先に壊そうとしたのは奏だった

（お、俺は、やればできる子……………いけるっ！）

そして口を動かす

「……………や、やあ。かわいい下着穿いてるんだね」

また暫く無言の世界へ

（な、何故だ……………何故喋らない……………も、もう一度か……………）

奏の口が動くのと同じタイミングでマリーがトレイを床にゆっくりと、ゆっくりと床に置いた

そして次の瞬間には奏の意識は消えていた……

(……………ん……………あ……………)

次に意識が戻った時には夜になっていた

(ここどこだっけ……………あ、そうか……………違う世界来たんだっけか……………)

いままでの出来事を順になぞってゆく

(マリーの部屋に入ってからからの記憶が無い……………うゝむ)

ムクツとベッドから起き上がり窓の外を眺める

（月が綺麗だ……………ん？月が見えるってことは地球に似ている
どこかの惑星なのか？）

少し考えこんでたが、らちがあかないのでまたベッドに横たわる

（まあ明日マリーに聞けばいいか。……………神田どうなったかな
……………俺の家族は……………クラスのあいづらも今は何してるんだろ
う……………）

いろんな想いが頭を過ぎり、いつの間にか涙が奏の目尻を濡らして
いた

（みんな……………俺は元気ですよ……………）

そして深い眠りにつき、新しい生活の一日目が終わった

デンジヤラス？

時刻は朝

窓から入り込む心地よい風がカーテンを揺らしながら部屋を包む

その風に乗って耳に入る鳥の囀り

ちよつとひんやりな爽やかな気温

そんな居心地の良い朝に起こされる奏

「…………ふぁ……………っ」

欠伸に大きな背伸びを一つずつ

こんな気持ちの良い朝だから、まだ眠気眼の奏

「……………まだ七時か……………寝よう……………」

時計も持っていないのにそう言い、またベッドに潜り込む

(気持ちいいなあ……………)

と、奏のねむねむワールドに乱入者が

マ「おっはよおおっ！朝だぞ、奏！」

大きな音をたてながら扉を開け、朗々と声をあげるマリ―

そんなマリ―をウザった気にベッドの、白く、あたたかい毛布に丸まっ

まっ包まる奏

傍から見たらベッドの上に蚕の繭があるようだった

マ「ん？奏くんはお寝坊さんかなあ〜？」

子供に語りかけるような口調なマリ―

ベッドの端に座り、毛布に包まってる奏をツンツンと突く

すると、蚕の繭のようなそれから一、二度、低くもごもごとした鳴き声が聞こえた

それを聞いたマリーはニヤーっと大きな笑みを浮かべ、奏もとい、蚕の繭に飛び掛かった

マ「ほらほらっ、起きろ奏っ！」

レタスの葉を剥くように布団を剥がそうとするマリー

しかしそれを必死に防ごうと、さらに布団に包まる奏

朝に弱い子供とそれを起こす母親との戦いのようにも見える

もちろんその戦いを制するのは母親。つまりマリーが勝利を収めた

「なんだよマリーっ！子供みたいにじゃれてくんないよっ！」

布団を剥がされ少し不機嫌な奏

マ「あら、私これでもあなたより大人のつもりよ？それに……朝に弱いあなたの方が子供じゃない……ねえ、奏？」

凶星をつかれた奏

「うう………ならマリーは年いくつなんだよっ！」

マ「え？あなたの一つ上よ？」

すると、がばつと体を起き上がらせ、今のマリーの発言に耳を疑う奏

（な、なんだって……！？俺の一つ上でこの容姿って………）

どうみても奏より一つ上には見えないマリーの大人っぽさ

そして知らず知らずのうちに視線がマリーの顔から下に移る奏

マ「今度はどこみてんの……………よっ!」

パチーンと乾いた心地良い音が部屋に響く

マリーの小さめな手の形がくつきりと、ハンコを押したかのように奏の頬に赤い跡がついていた

「な、なにすんだよお……………」

さっきのビンタでベッドからずり落ちた奏

マ「また私をいやらしい目で見てるから当然よっ!」

ぷいっ　と顔を背けるマリー

すみませんとへこへこしながら起き上がる奏

マ「あ、そうそう、朝食食べたら出かけるわよ」

そう伝えたマリーはベッドから降り、さらに奏について来てと言っ
た

お友達

さて、朝食を済ませた二人が何やらお話の最中のようだ

「で、今日出かけるって言ってたがどこに行くんだ？」

マ「ふふっ、私の知り合いのところにつ」

朝っぱらからなんでこんなに機嫌がいいんだと言いたげな顔の奏

そんな奏を気にもかけずルンルン気分で続けるマリー

マ「そろそろ行くわよっ」

「……………はいはい」

腰痛持ちの年寄りのように重く腰を上げ、マリーについて屋敷を出て行く

さて、屋敷の門を出て一番初めに奏が目にした物

これまた立派な馬車だった

マリーが座席の扉を開け、

先に乗り込む

（おおぅ……………これ俺ん家にあった車より乗り心地良さそうだな）

というのは、座席のことだった

しつこいようだがこれもまた高級感漂う、いや、高級な内装であり、座席なんか見るからにふかふかな感じを受けるくらいだった

（おおぅ……………や、柔らかい………）

そしてふかふかな尻の感触を味わいつつ、マリーに尋ねた

「なあ、マリーの親父さんってかなり権力の貴族かなんかなのか？
こんな高そうなものばかりだし……………」

マ「父親か……………残念ながら私は孤児なのよ」

「そうか……………悪かった」

いつも明るく振る舞っているマリーにも辛い過去があると聞いて驚いたし、詳しく知りたいがそこはノータッチが礼儀だろう。と、考えた奏

（俺にも辛い過去はある……………とは言ってもまあ小学生の頃、頑張って大をばれずにしようと必死こいてる時、なんとかばれずに個室に入ったは良いが、用をたし終え、ズボンをあげて、流そうと足でレバーを押そうとした時自分の足に他の誰かのはみ出して残っていた産物がついていた。まさにミイラとりがミイラになるとはこのことだと小学生の時に思い知ったくらいだが。ハハハ……………）

訳の解らぬ長い回想を終えた時にはもう馬車は動いていた

「……………そいや、知り合いつて誰なんだ？」

マ「まあ、会ってからの楽しみよ」

急かす奏を受け流すマリー

馬車を走らすこと一時間弱くらいだろうか、小高い丘を走っていると遠くに街が見えてきた

その街は、通ってきた途中にあった小さな町とは違い、とても大きな、いわば都のような街だった

「あ、あそこに行くのか……？」

マ「そうよ」

（あんなすごい街にいる知り合いって……………）

馬車は進み、ぼつぼつ家も現れてきた

窓から外を眺めると、

今まで見てきた景色と違いすぎてやはり異世界に来たんだとうしても実感してしまう奏

それからもう少し走らせ街中に入って行く

「すげえなこりや……………」

古代ヨーロッパのような魅力溢れる佇まいの家や店

店の看板のについてる錆もまた、魅力の良い味を引き立てる

マ「そんなキヨロキヨロしちゃって……そろそろ着くわよ？」

奏を見てクスッと微笑んでいる

もう少し石畳の道路を走ったところで、馬車は停まった

マ「ついたわよ、奏」

マリーが先に降り、奏も続く

さて、やっと目的地についた一行

その目的地とは、マリーの屋敷より大きな屋敷だった

屋敷の玄関まで歩いてゆき、マリーは挨拶しに行くのでここにいるよう告げられた奏

「ここもすんげえでかい屋敷だなオイ……………さて、どんなヒゲ面のオッサンが出てくるやら」

奏には、金持ちのオッサン＝ヒゲ面のイメージがあるらしい

さて、少し待っているとマリーがやってきた

そして屋敷に入ると、メイドさんがズラリ

「おおぅ……………」

こんな大人数に迎え入れられたのは初めてだったからか、たじろぐ奏

マ「ついて来て」

少し歩いたところにある部屋に入るとそこには、さつき奏が予想した通りのヒゲを生やした端正な顔立ちのオッサンと叫べないオッサンがいた

まだ年齢も40代なのではないだろうか

マリーと奏はその端正な顔立ちのオッサンもとい、おじ様と挨拶を交わした

？「私、この屋敷の執事のガーデンと申します」

深々と礼をするガーデン

「てことは、ガーデンさんはこの屋敷の主じゃないんですか？」

ガ「左用でございます。主は今……」

マ「さて、今日はアリスに用があつて来たのよ 呼んでもいいかしら？」

ガーデンの話を途中で切ったマリィ

そのアリスとやらを呼びに行ってしまったマリィ

「マリィとアリスって人はそんなに仲良しなんですか？」

ガ「マリィ様は昔からのアリス様のお友達なのです。出会いは小さい頃のパーティーでございました……」

少しの間ガーデンと奏の会話が続く

会話は扉が開く音によって終わった

音の発信源の方へ首を曲げるとそこには、マリーの隣にもうひとり
小柄な美少女がいた

マリーの身長からするとアリスらしい少女の身長150前半だろうか

マリーは美女、アリスは美少女といったところか

といってもさっきのガーデンとの会話で得た情報からするとアリス
の年齢は奏と同じ、マリーの一つ下らしい

(またやべえ美少女だ……………)

とりあえず

さて、アリスと対面した奏だが、マリーからあることを告げられた

マ「奏、あなたにはアリスと一緒に学校に入ってもらわよ」

「え？」

マリーは奏の耳に口を近づける

マ（あなたが異世界から来た人間ってことは極力こちらの世界の間には隠しなさい）

「わ、わかった……」

マ「よし アリスを守ってあげてね。この子かわいいからすぐ下賤な男が近づいてくるのよ」

（まあこんだけかわいけりや近づきたくなる気持ちもわかるな………）

ア「もうマリーたらっ、私はもう子供じゃないわよ？」

ほっぺを膨らませ、唸るアリス

なんとも愛らしい仕草だ

それを聞いたマリーはニヤーとした顔とジト目を合わせた、なんとも形容しがたい表情でアリスを見つめる

ア「な、なによっ………」

マ「なんでもないわっ」

ア「なによっ、マリー！」

仲の良い姉妹のようにも見える二人

(やっぱり付き合い長いと仲良いんだな……………)

それを見守る奏とガーデン

「で、マリー。用はどうしたんだ？」

じゃれあってる二人に横槍を刺す

マ「そうだったそうだった……………ガーデンさんにちょっと頼みがあるのよ」

ガ「は、なんでもございましょう」

マ「学校で私はアリスの傍に居てあげられないから奏を連れて来たの。だから少し護身術を奏に叩き込んで欲しいのよ」

「おいおい、俺はお守りかよ……………」

ア「私、こんな見ず知らずの人に護られるなんて気が引けるわ」

マ「アリスに何かあったときだけでいいわ。……………アリスは私にとって妹と同じなのよ。だから、ね？お願い、奏。」

(くそう……………そんなに頼まれたら断れないじゃんよ……………)

「……………わかったよ」

渋々引き受けた奏

ア「……………もうっ、マリーは私の言うことなんて聞かないんだら……………」

アリスも渋々承諾した

帰宅

馬の大地を蹴る音、揺れる座席

マリーと奏は帰路についている

マ「どうだった、今日の感想は？」

「ああ、こっぴどくやられて身体がガタガタだよ……………」

というのも、さっきまでガーデンと手合わせしていたからだった

「あの人……………めちゃくちゃ強いんだな……………」

マ「そうね……ガーデンさんももちろん強いけど、あなた、どこみても隙だらけだったわよ？」

痛いところを指摘され唸る奏

「……………だってよお、俺にしてみれば手合わせだって初めてだぜ？」

ガーデンとの手合わせを思い返す奏

……………

畳のような少し柔らかい床が敷き詰められた訓練部屋の一角で手合わせが行われていた

「くっ…………もう一丁!」

床から起き上がりながら声を上げる奏

ガ「む……………っ!」

起き上がりながら一気に懐へ詰める

(……………今回はいけるっ!)

ガーデンの襟をつかんだと思った奏だが、その手は空を切っていた

(……………あれっ!?)

腕を引っ張られた感覚、さらに奏の視界は天井へ向いていた

「……………ぐっ！」

背中から床に落ちた奏

（一体何が起きたんだ……………？）

説明すると、水戸○門の助○ん、角さ○が、襲い掛かる敵の腕を掴んでぐるんと宙を回転させるアレをガーデンが使ったのであった

……………

マ「まあそうだけど……………アリスを守れるのかしら……………」

溜息を一つつくマリー

「……………俺、アリスを守るなんてやりたくねえよっ！」

マ「あ、そう。なら学校も行く必要無いわね」

「ぐっ……………てか、俺はお守りで学校いくのかよー！」

マ「まあそつなるわね」

「なら……………行かなくてもいいわ……………」

マ「あ、そう？　かわいーい女の子たくさんなのねっ。残念。じゃあ私の執事でもやってもらおうかしら？　あ、でもこんなひ弱じゃ務まらないか！」

ぼろくそ言われる奏

「だ、誰が行かないって言ったよー！　さっきのは、その……………言葉の綾取りだよっ！」

マ（私の期待を裏切らない単純ぶりね……………！）

ガタガタ揺れる馬車の中の二人に、それからしばし沈黙の世界が流れた

「てか、俺はもとの世界に帰れないのか？」

ふと切り出した奏

マ「無理な話ね」

「なら、なんでマリーは来れたんだ？」

マ「ある人からの指令で送り込まれた……………これ以上は話せないわ」

「ふうん……………」

腑に落ちないが話せない以上探るのも悪い気もするし、何より身体が悲鳴を上げすぎて早く寝たい気分の奏だった

マ「悪いわね、奏。こちら側の勝手な意見で連れて来て……………」

「まあ確かに他の人とは違う体験できたからいいよ。帰りたくなったらその人に頼んで帰らせてもらう」

マ「そうね……………」

どこか悲しげな表情で外を見つめるマリィ

少ししたら屋敷が見えてきた

奏は屋敷へ着いたらすぐにベッドへ潜り込んだ

マ（ゴメンね……………奏。）

お買い物。お買い物？

「寂しい」が似合う廃れた町並み

地面に横たわる浮浪者達

微かな嫌な臭いも漂う

そんな場所に一人、青年がいた

「……………どこ……………だよ……………」

その青年は奏だった

汗を流しながら石畳の上を駆け巡っている

どうしてこうなったのかというと、時を戻すこと朝へ

今日の朝はのびのび起きれたと言わんばかりの大欠伸と背伸びをする奏

というのも、いつもマリーが奏を起こしに（悪戯しに）くるのだが、今日はどういふことかマリーは部屋にすら来なかった

「ふああ……………たまにゆっくり起きれるとなんか幸せに感じるな
っ
」

起こされるのではなく、自発的に起きれることに喜びを感じる奏

起こしにくるマリーを厄介者みたいな扱いをする奏だが、普通に考えてみれば美女が毎朝起こしてくれるのだから男なら幸せこの上なしなことなのだが

「今日は俺がマリーを起こしてやるか……………」

親切な発言にも聞こえなくはないが、ニヤつく奏の顔を見たら誰もそうは思わないだろう

いや、女性の部屋に勝手に入ること自体まずいが

ベッドから降り、腰を伸ばす

コキコキっと小さく音が鳴る

（このコキコキが気持ち良いんだよな）

身体を伸ばし終え、いざマリーの部屋へ行こうとした奏だが、行くまでもなかった

というのはマリーが扉を開け、入って来た

マ「奏っ、今日は買い物行くわよ！」

額に手を当てながら、また唐突に………と、ぼやく奏

仕度して馬車に乗り、あの街へと繰り出す二人

「ここに来るのは二度目だけどやっぱり興奮するなっ」

マ「そう？まあ奏には珍しい景色だもんね」

「ああ！……………で、買い物って何の買い物なんだ？」

マ「あなたも通う私達の学校は寮制なの。だからそのためのいろいろ準備しないといけないから、今日はそのための買い物なの」

「ふんふん……………しかし俺金無いぜ？」

マ「こっちの世界へ連れて来たのは私じゃない、だから心配いらないわっ」

そんなこんなで馬車から降り、徒歩で店を当たる

道からショーウィンドウで店の中を見ながら歩いてる奏だが、その

目は新しい物を見てはしゃぐ子供のような目だった

剣やら鎧やら、奏にとってみれば空想の世界でしか味わえなかった不思議な感覚を直に、自分の身体で体験しているからだろう

「マリー、あれは何だろう?」

顔をキョロキョロしながら歩いていたからか、向こうに人だかりが出来ているのを見つけた

マ「何かしら、有名人でもいるのかな?」すると、ドドドドドつと奏達の後ろからオバ様の大群が押し寄せてきた

「ちょ……………おいおいおい!わっ!」

オバ様の波にのまれた奏達

次々と迫り来るオバ様達

「いでっ！いでっ！いでっ！」

そんなオバ様達の肩やら足やらが奏の身体にぶつかって行く

何とか抜けだし、オバ様ウェーブも過ぎ去った

「ってあれ……………マリー？」

さっきいた所にマリーの姿はなかった

「おい！マリー？」

辺りを見回してもマリーの姿は目につかない

「……………どこ……………いったんだ……………?」

さらに辺りを見回していると、誰かの叫び声が聞こえた

叫び声が上がったらしい方向へ顔を向けるとそこには見覚えのある
ような姿が

「あれは……………アリス?」

アリスらしき女の子が男に手を引っ張られ連れて行かれそうになっ
ている

「……………オイ!」

助けるために駆け寄る奏

すると男は女の子の腹部に拳を決め、気絶した女の子を肩に担いで路地裏へ消えた

急いであとを追う奏

「くそっ……………担いで逃げてるからそう遠くは無いはず……………っ
！」

奏も路地裏へ入ろうとすると、横から人影が

？「奏君！」

それはガーデンだった

「ガーデンさん！ってことはやっぱりさっきのはアリスか……………」

ガ「はい。私としたことが迂闊でした……………アイスクリームが食べたいとお嬢様に頼まれ、店の中へ買いに行ってる隙に……………」

ガーデンの手にはアイスクリームが握られている

「ガーデンさんっ、とにかく捜しましょう!」

ガ「奏君、これを……………」

ガーデンは奏に何かを差し出した

「これは……………笛?」

ガ「はい。お嬢様の為の物なのですが、いかんせん着けたがらなくて……………見つけたらこれで知らせてください」

「わかりました!じゃあ二手につ」

奏とガーデンは別々に駆け出した

奏の石畳を蹴る音がこだまする

路地裏を駆け巡る

「……………どう……………だよ……………！」

長い距離を走っているから息が切れてしまい、さすがに足を止めて呼吸を調える

一回、二回、三回……………小刻みに、一定のリズムで奏の肺に酸素が送られていく

少し辺りを見回していると、他の道から男が走って行くのが見えた

「よしっ、あと少しだ………！」

太ももを二回叩き、また駆け出した

路地を男と同じ方向へ曲がる奏

少しずつ距離を詰めていく

「……………くっ……………！」

脇腹の痛みが奏を苦しめる

あと20m辺りまで詰めたところでまた男が曲がった

「……………よ、よしっ！追い詰めたぞ！」

曲がった先は行き止まりだった

くそっ！っと男が声を漏らした

男がアリスを石畳の上に横たえ、奏と向き合う

（あんだけ走ったのに息を乱してないだと……………！）

男は一回大きく息を吸っただけで呼吸を調えたようだ

一方奏はまだ息が乱れている

(…………ま、まずいな……………)

コキコキッと男の手から音が聞こえてくる

(……………そ、そうだった！)

ポケットから笛を取り出し、吹いた

？「何のつもりだ……………」

男が問い掛けてきた

「しよ、召喚するのさ……………」

？「な、なにっ！？召喚獣だと！」

男は慌てて奏に襲い掛かってきた

(……………ガーデンさん……………早く……………)

奏も構えるが既に男の膝が腹へ向かっていた

「……………ぐっ！」

何とか直撃は避けたものの、体勢を崩してしまった

(くそっ……………！)

次に迫り来るは男の右拳

避けられず、右拳は奏の頭に直撃した

石畳の上に倒れ込む

奏が立ち上がろうとする時には男の攻撃がまた迫っていた

今度は奏に止めを刺す勢いの足踏み

倒れ込んでいる奏の頭目掛けての攻撃

当たったら一たまりも無いだろう

奏は何とか横に転がり、避けた

避けたと同時に立ち上がる奏

しかしさっき受けた攻撃のせいで、足がふらついている

(……………ガーデンさんが来るまで……………持ちこたえないと！)

奏は男にタツクルをかました

そのまま抱き着く

男は奏の背中に肘打ちを次々と叩き込む

一発、二発、三発……………と次々に肘打ちを食らう

さらに膝蹴りも加わり奏の体力は限界にきていた

(……………意識が……………持たない……………)

奏の意識が飛び始めた時、男から力がガクンと抜けた

(……………?)

？「お待たせしました、奏君」

ガーデンがやっと登場

ガ「これ、持って下さい」

そういつて渡したのはアイスクリームだった

(……………なんて律義な……………)

男から離れ、そのまま石畳のうえに座り込む奏

さて、ガーデンと男との闘いが始まった

男の動きは既に知っているかのようにガーデンは男の攻撃を華麗にかわしていく

(……………す、すごい……………)

その神懸かった動きに驚嘆の奏

男の攻撃はガーデンには全て当たらず、ガーデンの攻撃ばかりが男に決まっていく

次々と攻撃を食らい男は膝を石畳の上につけた

ガ「さて、お嬢様を誘拐しようとした理由を教えてくださいませんか？」

ガーデンが尋問を始めた

奏はアリスの元へ行き、肩に右手を回し上半身だけ起こした

「……………アリス？」

声をかけながら軽く揺ると、うつすらと目を開けた

ア「……………あ……………なんで私ここに……………」

「ガーデンさん、アリスが気がつきました！」

ガーデンにそう告げてアリスに向き合う

ア「……………あれ……………奏……………？」

うんうんと首を縦に振り、奏はアリスにアイスクリームを渡す

あれだけ動いたり時間が経っているというのにアイスクリームは買った時と同じ形で残っていた

「ガーデンさんが買ってきてくれたよ」

目を醒ましたばかりにアイスクリームを渡すとは多少気はきかないがアリスはそれを受け取る

そしてアリスは食べはじめた

ガーデンはまだ尋問をしているらしい

5分くらい経ち、アリスはアイスクリームを食べ終わった

ア「美味しかった……………っというか、いつまで触ってんのよ！」

というのは奏がずっと肩に手を回していることにアリスの気がふれたようだ

奏を突き飛ばすアリス

ア「バカ！エロ！変態！」

散々言われる奏

（そんなに言わなくて……………）

助ける為に頑張った奏としてはお礼の言葉一つくらい欲しいところだった

ガーデンが男の手を縛って、二人の元に来た

ガ「お嬢様。今日のところはもう屋敷に戻りましょう」

ア「そうね……………じゃ、帰りましょ」

ガーデンが奏に、ついて来るよう促した

ア「……………なんでこの変態スケベ痴漢がついて来るのよ」

ガ「お嬢様、奏はお嬢様を助ける為に必死になってくださいました。そのような発言は、失礼ですぞ？」

ぷくーっと頬を膨らませ、唸るアリス

(はぁ……………なんか疲れたよ……………)

まだ男に痛めつけられた身体が悲鳴をあげている

路地裏から出るとガーデン達と別れ、奏はマリーを捜し始めた

ちなみに男の身柄は役人に引き渡すそうだ

奏がマリーを捜す前にマリーが奏を見つけ、駆け寄って来た

マリーの手には荷物がたくさん掛かっていた

マ「奏！どこほつつき歩いてたのっ！」

「え、いや……………あの……………」

奏が今までの行き先を説明する前にマリーがまた話しだした

マ「罰として荷物全部持つててね！」

マリーの手に掛かっている荷物を全部奏に押し付けた

(……………今日は厄日だ……………)

荷物の量からしては軽かったが心も身体もボロボロの奏にはかなり
痛手の攻撃だった

(……………買い物なんか嫌いだ……………)

そこから馬車まではそう遠くはなかったのが奏にとって唯一の救い
だった

School Life

どうも、奏です

さて、今俺は学園生活をたのしんでいる

こっちの世界に来て、まさかまた学園生活を送れるとは思ってもしなかった訳だが

俺は今、とても幸せだ

理由？

そつだな……………まず第一に環境が違う！

元居た世界の高校、窓から見える景色もそこまで悪くなかったがやはり見慣れた物ばかりだったしな

第二！かったるくて、生活に必要なさそうな授業じゃあない！

魔法だったり錬金術だったり……俺は使えないにしろ、ワクワクするし楽しすぎる！

さらにかわいい女の子もたくさんいるし、転入生ってことであるハーレムだし、ニヤニヤ止まんないし、俺イケメンだし、俺がはにかむと女の子倒れるし、おかわりじゃなくてお触り自由だし、ちゅっちゅしまくりだし………

とまあ何と云うか最高の学園生活！

って期待してたんだがなあ……………

現実はその甘くなかったよ。うん

なんでこんなこと言うのかって？

男のロマンだよ！うん

はあ……………そろそろ目を開けないといけないみたいだ……………

それじゃあ、また。

誰かの声がする

？「おい！早く立てよ！」

顔が熱い

身体中が痛い

関節もギシギシする

？「早く立てつつてんだよ！」

ああ……………また腹が痛くなった

蹴られたみたいだ

早く立たないと……………

でも身体が言うこと聞いてくれない

もうダメなんかな……………

いや……………俺はまだいける

あ、また蹴られたみたいだ

マリーゴメン、約束守れな……………かつ……………た……………

遂に奏の意識が飛んでしまったようだ

どうしてこうなったか順を追ってみよう

学園に編入生として無事、入学して来た奏

この日の奏は授業ではなく学園の中をアリスの案内で見て回った

しかし奏は目新しい環境に興奮して教科室の名前など覚えてないが

その内に昼休みになり、

校内にある超高級レストランと言ってもいい学園の食堂でアリスと昼食をとっていた

少しすると三人組の男生徒がレストランもとい、食堂に入ってきて来た

周りが少しざわつくのが感じられる

その三人組の内の一人、リーダー的な男生徒がアリスに話し掛けてきた

背も奏より高く、体格も見た感じからすると少し鍛えてるようだった

三人は俗に言う不良のようだった

そのリーダー的な男生徒はアリスの手をとり、こんな男とじゃなく昼飯を一緒にしようと言っている

アリスは嫌がり、掴まれている手を振り払おうとするがやはり男と女だと力で勝つのは男だ

そんなやりとりを目の前で見せられている奏は椅子から立ち上がり

男の手をアリスからはがした

もちろん男はキレた

始めは口論だったがやはり若き男子としては拳で語らねばならないのだろう

ということ喧嘩になった

引越しのバイトで少しは鍛えられている奏のガタイもあり体格的には奏と男はそこまで差は無いが、決定的に違うものがあつた

それは魔法

相手はこちらの世界で育つた純粋な魔法使い

一方奏は魔法が使えない

相手も不良っぽいといえど流石に魔法が使えない奏に、さらに食堂では魔法を撒き散らさないと考えていたがそうではなかった

こちらの世界では魔法が使えて当たり前

さらにこの学園は魔法使いの勉強の為の上層学園と言って言ってもいいくらいの学園

そして何より奏が魔法を使えないということを誰も知るよしもなかった

男が魔法を詠唱すると奏の身体は動かなくなった

しかし顔は動くようなので卑怯だ反則だなんだいろいろ叫んでいると顔面に一発食らった

それからはいわゆるリンチだった

ボコボコにされ、男がパチンと乾いた、小気味良い音を指で鳴らすと奏の動かない身体から魔法がとけ、倒れ込んだ

そしてそこからはさっきのように蹴られたり踏まれたりしていた

そして、意識が飛んでしまった訳だった

次に奏の意識が戻ったのは放課後になってからだだった

（なんだろう、なんか独特の香りがする……………）

ここは保健室だった

（何かに包まれてる……………ベッドかな？）

瞼を開きたいが重すぎて開く事ができない

（いったいどのくらい時間が経ったんだろう……………身体が痛い。
瞼も開けない……………）

少し経つと奏は瞼を開いた

（ここは……………保健室……………かな？）

真っ白なベッドに横たわっている奏

首を左へ向けるとそこには椅子に座っているマリーがいた

マリーは奏が寝ているベッドにもたれ掛かって寝ていた

（見舞いに来てそのまま寝ちゃったのかな……………？）

なんて模索していた奏だが、自分の事を考えて少しブルーになっていた

（俺、弱いな……………こないだは魔法無しなのに俺一人じゃ勝てなかったし……………今回も魔法を使われなかったとしても勝てたかわかんなかったし……………マリーとの約束破りまくりだ……………）

案外奏は約束を律義に守るたちのようだ

「ガーデンさんに弟子入りしようかな……………」

ぽつりと漏らした独り言

声はすぐ部屋の壁に吸い込まれていった

（マリーの寝顔ってかわいいんだな……………いや、女の子なら誰でもそうか）

ニヤニヤし始めた奏

マリーを起こさないように上半身を起こす

「……………いっ……………ふう……………」

やはりまだ痛みは消えてないようだ

奏はマリーのほっぺを突き始めた

「……………うむ。張りよし、肌よし、フニフニよし」

ぶつぶつ言いながらマリーのほっぺを突いたり軽くつまんだりしている

(……………何と言うか……………ムラムラしますなあ……………／／／)

ニヤニヤ侵食が激しく、さらに手つきがいやらしい奏

ここは学園内です

(……………このフニフニ感……………たまんねえ／／／)

奏は妄想の世界へと旅立った……………

マ「あ、起きた？／／／」

「ああ」

マ「奏、もお身体痛く……………ない？／／／」

「ああ、もう大丈夫さハニー。君の愛が僕の傷を癒してくれたのさ……………」

マ「もおっ！奏のばかぁ……………次無茶したらちゅーしてあげないぞっ／／／」

「……………ああ……………そんなこと言うからまた身体が痛みだしたよ……………ちゅーしてくれたら治るかもしれないな……………」

マ「んもお……………目、つぶって……………？／／／」

（なーんてことに……………たまんねえたまんねえっ！／／／）

妄想の旅から帰還した奏

今、奏の脳内は有頂天に達していた

マ「奏、いつまで触ってんのよ」

フニフニ触られ起きたマリィ

しかし今、妄想の旅をしている奏にはマリィの声は届いていない

マ「奏くーん？いつまでやってるのかなー？」

奏の目の前で手を振るが全く気づかない

今の奏の顔は形容しがたいニヤけ顔である

マ「いつまでやってんの……………よ！」

パシーンと一発気持ちのいい音が部屋に響く

奏はビンタの衝撃でベッドから落ちた

「……………っ……………ぐ……………っあ……………」

不意の出来事に声が出ないようだ

床の上でもがき苦しむ奏

マリーはまったく、と言わんばかりのため息をついた

奏はしばらく起き上がらなかった

マリーはベッドから落ちたまま姿を見せない奏が心配になり奏の元へ駆け寄った

奏は床の上に仰向けでぐったりしていた

マ「奏！大丈夫っ！？」

流石にほっぺをいじられた仕返しにしては怪我人にはやり過ぎたかもしれないと不安になるマリー

奏の肩に手を回し、上半身を起こす

マ「奏……………奏っ！！」

むにゅっ

マ「え……………？」

奏の手はマリーの胸を捕らえていた

もみもみもみもみ

奏の掌の中でマリーのたわわに実った果実が次々に形を変えている

「仕返しっ」

ニイっとな奏の顔が緩む

マ「……………きゃああああああっ！！！！」

ドゴッ！ボグッ！メキャッ！ゴギゴギッ！パシンパシンッ！

少しの間、保健室から悲鳴と不可解な音が響き渡る

保健室の先生が悲鳴を聞き付け、マリーを止めたことで奏の死は免れた

「……………う……………あ……………」

ベッドの上で声にならない声を漏らす奏

顔もかなり腫れていてイケメンの面影は消えていた

マ「次またやったら今度こそ止めを刺すわよ……………」

ギロリとマリーに睨まれ、ビクンッ！と身体を震わせる奏

（お、漢なら…………やらないといけないことがある！）

なんて言ってもまた殺されるだけなので心にしまっておく奏であった

（まあ、めっちゃくちや気持ちかったしいいか……………）

今日の収穫は身を危険に晒してまで手に入れた物だと言わんばかりの誇らしさ

がんばれ奏！お前ならまだまだいける！

「つかあいつはどうなった？」

マ「あいつって？アリス？それともヴァン？」

「ヴァンってあの男のこと？」

マ「そう。あのあと大変だったんだからねー、私が食堂にちょうどよく来たからよかったものの」

「その、ヴァンは………一体どういう奴なんだ？」

マ「そうね………端的に説明するなら私のクラスメイト。で、学園内一のやんちゃ君。ってところかしら」

「俺の一つ上だったのか………」

マ「最近よくマリーにちょっかい出してるのよね」

「…………アリスは大丈夫なのか？」

マ「ええ。私が寮まで送ったわ」

「何も無いならよかった……………」

マ「あなたのおかげよ。ありがとう、奏」

「気にしないで。ところで一つ聞きたいんだけど」

首を傾げるマリー

「ガーデンさんってアリスの屋敷にいるのかな」

いきなりだったので少し驚いたマリーだったがすぐにこの意味を察した

マ「今ちようど寮のマリーの部屋にいるんじゃないかしら？」

「ん？………てことは執事とか召し使いさんって学園内でも主人のお世話するの？」

マリーは首を横に振った

マ「ガーデンさんは特殊なのよ。アリスの家の執事でもあるけど、この学園で教鞭もとっているの」

「ほーほー。なら急がなくても大丈夫か……」

マ「強くなりたいたい気持ちはわかるけど今は身体を休めなさい。明日授業受けれる？」

「でたいのはやまやまんだけど身体が……………」

マ「なら私が伝えとくわ。寮には戻らないで今日はここで寝なさい」

「あ、ああ……………」

マ「じゃあ私は用事があるから戻るわ。先生、よろしく願いします」

仕事中の先生にお辞儀をして保健室から出て行ったマリィ

「今日はもう寝よう……………」

S c h o o l L i f e 2

満月が映える漆黒の夜空

窓から流れてくる涼しい風

「ん……………」

風に撫でられ目覚めた奏

「ふぁ……………夜……………か……………」

ベッドから下り大きな伸びを一つ

「あ……………痛え……………」

まだ体に痛みがかなり残っているようだ

「暇……………だな……………」

保健室には奏一人

「少し探索でもすつかあ……………」

保健室の扉を開け、廊下へ出た

「うおっ、綺麗……………」

窓から差し込んでくる月の光は廊下を幻想的な景色にしていた

少し歩くと薄い、ぼんやりとした灯がついた

「おっ……………流石魔法学園」

階段を上り夜の景色を一望するために屋上へ行った奏

屋上へ着くと一つ人影があった

（あれ……………先生かな？）

少し目を凝らすと生徒である事がわかった

奏は夜空を見ながらさりげなくその人影に近づいた

？「……………誰」

「いやあ、夜空が綺麗なもんで見に来たんだ」

生徒は女の子であつた

身長はアリスくらいの小柄で髪は肩につくくらいのそこまで長くない茶色の毛

（この人、学年同じかな？）

尋ねてみたが返事は返って来なかった

会話も無く、しばらくの間夜空を見つめる二人

奏はゴロンと仰向けになり目をつむって冷たい、

流れる風の感触を楽しんでいた

？「近いうち貴方に厄災があるわ。気をつけなさい」

そう言い残し彼女は屋上から立ち去った

(……………?)

それから少し屋上にいたが寒くなってきたから奏も屋上をあとにした

「あんまし動き回るのも今の体には良くないし寝るか」

保健室に戻ろうと階段を下りている途中、明かりの灯っている教室が一つあった

教室といってもどれもが講堂のようなものだが

「お……………さっきの人かな」

その教室に行く途中、奇妙なモノを奏は見た

「あ、あれは……………っ!？」

他の教室の黒板の前で首吊りした生徒を見つけたのだった

(ママママママママジかよっ!?)

恐怖を覚えた奏はひとまず明かりのついている教室に行つてさっきの彼女に先生を呼んで来てもらうことにした

しかし明かりのついた教室には誰も居なかった

（あれ、誰も居ないのか…………でもなんか机の上に置いてある）

こんな事をしている暇は無いことはわかっていたが何故か吸い込まれるように教室に足を踏み入れ、その何かを確かめに行った瞬間――
つしかない教室の扉が閉まった

（えっ……………！？）

いきなり扉が閉まったことに驚きながら扉が開くか確かめた

「開かない……………」

かなり焦り始めた奏

（さっきの首吊りといい、この扉といい――一体何が起きているんだ）

何かを確認するため近づく

（これはメモ用紙と袋？）

そこにあつたのは何かが書かれたメモ用紙と何かが入った口の縛られた黒い袋だった

まずメモ用紙を読み始めた奏

(……………よ、読めない)

そう、奏はこちらの世界の字が読めないのである

(マズイヨ。マズイヨコレ……………)

恐らくメモ用紙には呪われた生徒の言葉なり攻略のヒントなりが書いてあるはずなのだが読めない奏にはただ古代文字が書いてあるだけにしか見えない

(ど、どうしよう……………そうだ、この袋にヒントがつ)

黒い袋の紐を解き中を覗いた

「うわあああああああ%#£ 〒#&*@§ \$¥

っ！！」

中に入っていたのは生クリームならぬ生首だった

生首を見て恐怖の底に堕ちた奏は教室の扉に急いで駆け寄り開ける

「くっ……………開けっ……………開けよおっ！！！」

しかしながら先程確認した時と同じで扉は魔法をかけられたように
びくともしなかった

「はぁ……………どうしよう……………生クリームと一晩過ぐすなん
て嫌だぜ俺……………」

かなりパニックになっている奏

「どうしたものか……………こっちの世界の文字読めないしよお……………」

なんで言葉は話せて文字読めないんだとか、マリーに教えてもら
うかとかいろいろと呟いている奏

？（文字が読めない……………？）

「……………ッ！！」

（今……………視線のようなものを感じた……………）

教室の中をぐるーっと見回すが誰も居ない

（脱出の手掛かりを少し調べてみよう……………）

するといきなり明かりが消え、ガタガタッと大きな音がした

（……………マジでなんなんだよッ！！）

明かりはすぐに戻った

奏はまず黒板周辺を探索し始めた

（にしても縦にも横にも広い教室なこと……………）

大学の講堂のように教師の立つ位置からどんどん奥の方が高くなっている

「……………ん？」

奏は黒板の隅に何か書かれてあるのに気づいた

「……………よ、読めない」

奏はまた絶望した

（これ読めたとしたらホントは「今日の犠牲者。奏」とか「死ね！
」とか書いてあるんだろうな……………」

「……………やはりこつちの世界だといろいろ不便になるなあ」

？（こつちの世界……………！？）

「……………誰だ……………ッ」

また視線を感じた奏

何故か鋭い

（こっちの方から感じた気がする）

窓側の方へ歩み寄る

柱。窓。カーテン。灯。何等おかしいところは無いが奏はあることに気づいた

（あそこのカーテン……………もっこりしてる……………）

見つけたそのカーテンに静かに且ゆっくり歩み寄る

そしてカーテンに手をかけようと近づくと、カーテンがビクッと微

かに動いた

(ッ)……………もし、これが罠だったらどうしよう……………完全に
打つ手無しになる……………ここは慎重にしよう……………)

「も、もしもし。もしかして、あの、生首さんの身体の方ですか…
……………」

少し間があり、返事代わりにだろうかガタガタッと大きな音が鳴り、
明かりがまた消えた

「……………!!!!!!」

声に成らない悲鳴

カーテンから目を離さず後退りする奏

……タスケテ……クレ……ヨ……ナア……ウラミヲ……
……

「う、怨みを俺が晴らせば良いのか……っ？」

……オマエヲコロシテヤル……！

「うわあああああああッ……！！……！！……！！」

と、同時に奏の肩に何かが触れた

「アアアアアアアアアアアアアアアッ
……！！……！！……！！……！！」

？「ばあ、驚いたっ？」

かなりの萌え声に呼びかけられ、振り向くとそこには女生徒がいた

思考回路がやられた奏はその場に硬直してしまった

？「おーいつ。もしもおーし？」

その後

？「あははっ、ゴメンね奏君」

「まったく………かな・り悪ふざけが過ぎてるよっ！」

？「へへへっ」

「はぁ……………」

（どうやらこの事件の犯人はこの女生徒のようだ。彼女は魔法を使った悪戯が好きで、よく今回のような悪戯をやっているらしい。ちなみに生首はりんに幻覚魔法をかけてたとのこと）

「……………悪戯するのもいいけどあんまり度が過ぎたらダメだぞ？」

？「はぁい」

（ちなみに彼女の名前はルナリア。同学年で、皆からはルーとかルーちゃんとかるんるんって呼ばれているらしい。要出典。何と言うか声に反比例してなく、容姿は小柄で半端じゃなくかわいい）

「そいやルナリア」

ル「なあに？怒るのはダメだよぉ？」

「あの教室に首吊り生徒仕掛けたのもルナリアか？」

ル「え？私そんなことしてないよぉ？」

「え……………？」

ル「だって今日この教室以外は私使ってないよ？扉の近くに教室に入るようにする魔法かけといたし、扉開かなくしたのも私だし……
……………」

「ちょっとルナリアもついて来いッ！」

ル「え？え？なに？ま、待ってよぉ」

急いで教室から出て首吊り生徒のいた教室へ走る奏

（あの首吊り生徒がルナリアの罨じゃないとしたら……………まさか！）

教室の前についた奏

（な、ない……………首吊り生徒がない……………）

ル「はあはあ、どおしたの？奏？」

遅れてやって来たルナリア

「いや、さっきここに首吊り生徒が居たのを見たんだ……………」

ル「え？誰もいないよ、奏？」

奏は血の気が引くのを感じた

この学園には七不思議があるのかないとか

もしかしたらその一つが首吊り生徒なのかも知れない……………

「ま、まままってくれ！」

今、たくさんの女子に囲まれています

普段なら狂喜の沙汰なんですが今回は違います。助けて下さい

女「変態！スケベ！どっせのぞきに來たんでしょ！言い訳なんか聞きたくないわ！ねえみんな！」

うんうんと女生徒達は頷き、さらに罵声が飛び交う

ちなみに今、両手両足縛られてます。SMプレイがお好みなんですか
ようか

なんでガーデンさんに会うために女子寮に来たのにこうなったんだ

しかも女子寮入口の石の床の上に素足正座とかまだ怪我人の俺には
キツイです

しかも何気にヴァンもいるし

あの野郎、アリスに逢いに来たのか…………

女子のほとんどはいま俺の元に集合している

それをいいことにヴァンが俺の方を見てニヤリと笑みを浮かべ、窓
から静かに女子寮へ入って行った

あの勝ち誇ったような顔が頭から離れない

しかしその顔をまたすぐに見ることになった

ヴァンが侵入して一分したあたりに女子寮の中から悲鳴が響き渡った

もちろん俺の元にいる女生徒がすぐに悲鳴の元へ向かう

しかもただの女生徒じゃあない

見るからに強そうな顔の重（獣）戦士数人の少数精鋭だ

正直な話、彼女達に迫られたらヒイイイイツどころじゃ済まない
だろう

何とも恐ろしい戦乙女だ

そのうち霊を味方にしてやってきそうだ

まあ予想通りというか何と言つか、ヴァンが引きずられて連れて来られた

ヴ「……………う……………腕がもげるうううつっ!」

苦痛に顔が歪んでいる

戦乙女達が奏と同じようにヴァンの腕と足を縄で縛り上げる

そして裸足にさせ、奏の隣に正座させた

裸足にするのは拷問のポリシーらしい

ヴ「オ、オイッ！俺にこんなことしてただで済むと思ってんのかっ
！？」

戦乙女達がズイツと前にでるとヴァンはしょぼんとなってしまった

（っっていうか、ヴァンってこんなキャラだったのか……………人
は見た目じゃ判断できないな）

ヴァンのキャラに少し驚いた奏

女「さて、なんで私達の寮に来たのか聞かせてもらおうかしら？」

ヴァンは女生徒達を脳にストックされている褒め言葉の限りを尽く
しておだてている

女「あんたはなんで女子寮に来たのよっ！」

女生徒達は奏の方へ視線を向けた

「俺はガーデンさんに会いに来たんだ。だけど女子寮の前にいた女の子に話し掛けたら悲鳴上げられてね。理不尽にもこうなったわけなんだ」

女「ガーデンさんに会いに来たってホントかしら……ホントは覗きに来たんじゃないのかしら」

女生徒達はこそこそ話をし始めた

「あ、ちょ、おい！ホントだって！」

ヴァンにいたっては存在自体スルーされていた

向こうからアリスが歩いてきた

ア「あれ？女子寮の前に人だかり……？」

アリスは人だかりが気になり見に来たが、そこに見覚えのある顔が二つあった

ア「か、奏どうしたの！？」

ヴ「アリスッ俺の事は！？」

「お、アリス！助かったあー」

女「どうやらホントみたいね」

奏は解放されアリスの元へ

「アリスうゝ助かったよお」

ア「ちょ、ちょっとそんな近づかないでよっ……………もお」

ヴ「ア、アリス……………俺は……………？」

ア「あのね……………気安く名前で呼ばないでよ。気色悪いっ」

ヴ「え……………」

女「……………コイツは確実に処刑ね」

ヴ「ヒイイイイイイッ!」

奏はアリスについて行き女子寮のアリスの部屋へ

(ヴァンが囲まれてる……………ご愁傷様です)

ヴァンの方へ手を合わせる奏

ア「奏ー?早く来なさいよ」

「ああ、悪い悪い」

アリスの部屋に入った二人

(うわっ……………整ってんなー)

奏のいう通りとても部屋の中は整っていた

「つか、男を部屋に入れるのに抵抗無いのな」

ア「え？だって……………奏なんて男として見る必要無いし！」

「さりげなく酷い事言つのなお前……………」

ア「で……………女子寮に来たって事は私に用があるんでしょ？」

「いや、俺が用があるのはガーデンさんなんだ」

ア「ああそう……………って、なら女子寮じゃなくて直接ガーデンに会いに行けばよかったじゃない」

「いや、そうなんだがガーデンさんがどこに居るかわかんないしさ。アリスに会えばわかるかなーって」

ア「なるほどね。まあその内ガーデンが訪ねてくるはずよ」

「毎日訪ねてくるのか？」

ア「まあ教師としての時間が終われば私の執事だしね」

「忙しそうだな。まあしばらくお世話になるわ」

ア「え？それってどういう意……」

コンコンッ

ドアがノックされ声が聞こえてきた

ガ「入ってもよろしいですか。お嬢様」

ア「いいわ、入りなさい」

扉を開け一ツ礼をしてガーデンが入ってきた

ガ「お嬢様、今日もお疲れ様でした。今日は奏君も一緒にですね」

「どうも、ガーデンさん」

ガーデンに一礼する奏

ガ「して、奏君。私に用がありそうですね」

ガーデンは奏の言いたい事を既に察知していたようだった

School Life 4

こんにちは。奏です

さて、今は授業中

しかし俺は瞼も頭も体も動かないんですよ

というのも、ガーデンさんに特訓の申し出をしてめちゃくちゃシゴかれて体中の筋繊維がスタボロに切れまくり、あーんど ヤイアンにやられた後ののび みたいに痣だらけ

しかも特訓とは銘打っているものの内容はアツアツのカレーを頭から被っても平気になれるんじゃないかってくらいの熱いスポ根トレーニング

もうこんな意味不明な事しか考えられないくらい眠いです

で、今の授業なんです

外で遊びましょってどこの幼稚園だよッ！！！！

『自然に触れ草木や動物、命の流れを感じ取りなさい』

っていうことらしい

皆好き勝手に遊んでいるだけにしか見えないのは俺だけなのでしょうか？

まあそんな俺も草の上に寝転んで寝てますが

ア「体大丈夫？」

ル「カーナーでーくーん」

視界が暗くなつたから目を開けるとそこにはアリスとルナリアがいた

「体はボロボロ、最高に眠いよ」

奏は上半身を起こし三人で座って話し始めた

（美少女二人と仲良くお話ですよ。元居た世界じゃ考えらんない体験だぜ）

するとそこに一人お客様がいらっしやった。それは教師のマグエルだった

マ「やあ。少し私もお邪魔してもいいかな？」

三人にニコツと優しい笑顔をその顔で作ってみせた。マグエルは若く、いかにも温厚で誰にでも好かれそうな人柄を感じさせる人だ

ル「マグちゃん一人入りまあすっ」

「なんだそのドンペリ入ります みたいな口調は」

ア「ドンペリ？」

「あ、いや何でもない何でもない」

マ「おや、そう言われると気になりますね」

笑顔のマグエルは眼鏡をくいつと上げながら奏を追撃してきた

（マズイヨ。マズイヨコレ……………俺の方の世界の事は話しちゃダメ
ってマリーに言われてるし…）

「そ、それはだな……………」

その後とめどない三人からの追尾ミサイルをなんとか振り切ったわけだが、

ルナリアが核のスイッチを持ち出した

ル「そおいえばねー、こないだ奏をおどかしたんだけどねー」

ア「まだ悪戯なんてやってたの？」

ル「奏くん、字が……………」

「うゝあゝあゝっ！！ダメダメ！！」

（これ以上俺の世界に関係ありそうなこと突っ込まれたら終わりだっ！！）

奏はルナリアの口を塞ごうと手をもっていった時急に動いたからか体勢を崩した

「のわっ！！」

ル「きゃっ！！」

奏はルナリアに倒れ込まないようにとつさに腕を突き出した

ア「あ……………」

マ「おやおや」

その体勢は奏がルナリアを押し倒した体勢になっていた

ル「奏くん…………昼間なのに大胆だね……………」

ルナリアは顔を紅くしている

「な、ななななななに誤解されるようなこと言ってるんだよルナリア!!」

マ「こらこら奏君。大好きで誰にもとられたくないからって皆の前で見せ付けるのはよくないですねえ」

「せ、先生え!!」

茶化すマグエルの冗談を返しながら急いで体勢を直す奏

ア「.....」

違和感に気づいた奏

ア「いちゃつくならあそこの森行きなさいよ」

(.....怖い怖い!!目が笑ってない!!)

ル「あはっ、冗談だよ」

マ「なかなか面白かったですよ。二人とも」

「せ、先生え!!」

マ「はははっ。さて、今アリス君が『森』と言ったね。少し行ってみようか」

ア「他の生徒はどうするんですか？」

マ「なーにこの年頃だ。自由に遊んでるほうが楽しいでしょう」

（わかってて放置してたのか……）

マグエルは生徒達に『森に行ってきます。私がいなくてもしつかりとこの自然を感じなさい。』と言い残し、奏達と森へ入って行った

森の中はとても幻想的な世界だった

木々の間を抜けて差し込んでくる日の光はとても綺麗で自然の暖かさを感じさせる

マグエルの後をついて行き、

森の中のいろいろな場所を見て回った

マ「さて、ここからは自由行動です。

探索し終わったらまたここに集まってください。私はこの切り株の上で読書して待ってますから」

ル「私はくたびれちゃったから先生と一緒に居るねー」

「てことは……………」

ア「奏と一緒に行動？」

ル「いつてらっしゃい」

ルナリアはただ『いつてらっしゃい』としか言わなかった

（意味深だ……………全く……………）

「どうすんだ、アリス」

ア「まあ私を護衛する人間と一緒に行動することも必要よね」

「護衛ねえ……………」

（学園の中ではガーデンさんは教師。教師としてはアリスを特別扱いできないからな……………）

ア「行きましょ、奏」二人はしばらく歩き、止まった

ア「少し疲れたわ。休憩しましょ」

アリスはその場に座り込んだ

「喉渴いたな」

ア「そうね。でも、この辺に水気は感じられないわね？」

（ん？なんか聞こえる……………）

「アリス、水の魔法は使えないのか？」

ア「生憎私金づちだからか水の魔法と相性悪いのよ」

（またなんか聞こえる……………）

「なるほど。ちょっとこの辺に飲み水が無いか見てくるよ」

ア「あら、ありがと。じゃあ待ってるわ」

奏は何か聞こえてくる方へ歩いて行く

そのうちアリスの視界から奏の姿は見えなくなった

ア「……………あいつなんかこっちの人間と雰囲気違う感じがするのよね……………」

「こっちか……………」導かれるように森の中を進んで行く奏

「……………あつたー!!」

森の木々が開け、そこには小さな湖があった

……………キナ……………サ……………イ……………

「あ、今なんか聞こえた……………」

..... キナサイ

「はははっ、来いってか.....」

奏は聞こえてくるがまま湖の前まで歩み寄る

「..... 冷てっ」水に触れるとひんやりと冷たかった

「..... かしなんで呼び出されたんだろ？」

すると湖の中から髭の長い龍が現れた

「..... あ..... う.....」

奏はいきなりあらわれたこの龍の存在に恐怖し動けなくなっていた

『..... ヨク来タ..... 異世界ノ人間ヨ.....』

「..... あ..... しゃ、喋った.....」

龍は首を伸ばし奏の元へ近づいた。一方奏は龍が喋ったことに驚い

ている

「……………な、何の用なんだ？」

『……………奏……………才前ガ来タコトハ……………トテモ嬉シイ……………』

「あ、はあ……………どうも……………」

『……………コノ姿デハ……………話シニクイヨウダナ……………』

龍の体が一瞬光り、次奏が見た時龍は人になり、湖の上を浮いていた

「おお……………で、俺に何の用なんですか？」

『私もこの姿でいられる時間は少ない。奏、お前は魔法が使えないな』

奏は一つ頷き、肯定する

『お前に力を与えるのが私の役目。さあ受け取れ』

龍人は右手をかざし、奏の胸に突き刺した

「ぐッ……………ッ……………グアッ……………」

『力は大事な人を護る為に使うのだ』

「あ……………あ……………」

奏はそのまま意識が消えてしまった

「……………なで……………で……………奏……………奏！」「ハッと目を醒ました奏

ア「全く、何でこんなところで木によっ掛かって寝てるのよっ」

「あ、ああ……」

ア「ああじゃないわよバカ！ほら、先生のところに戻るわよ！」

奏は立ち上がりアリスについて行く

ル「あ！おかえり」

ア「ただいま。先生、ルナリア」

マ「お帰りなさい。二人の冒険はどうでした？」

ボタンと本を閉じアリスを見上げマグエル

ア「最悪よ。まったく……」

マ「おやおや、奏君はどうやらアリス君を怒らしてしまったようですね。さて皆さん、帰りますか」

ル「はい」

（一体……あの出来事は何だったんだろうか……）

奏はガーデンとの特訓のあと、大浴場に入る時胸元を見ると一つ傷跡があったそう

School Life 5

チャイムの音とともに今日の授業が終わった。さて、なんと明日は休みなのであります！

（休みの日は特訓が無い。こっちの世界の物とか景色とか見たいし、明日は街にでも繰り出そうかなー）

久々の休日でうきうき気分である

自分の部屋に戻るべく教室から出ようとすると、奏の目にある光景が

？「アリス。明日は休みだね……………どうだい？この僕と一日共にするっていうのは」

ア「え、ああ、その、ね」

めんどくさそうに対応しているアリス

（認めたくは無いがアリスはかなりモテルんだよね……………周りにもっとかわいい人いるだろうに）

今日アリスにデートのお誘いしてるのは、奏の前に座っているハーレイだった

ハーレイは超絶イケメン。本来なら誰もが羨むその美貌でモテモテ

のはずなのだが、あまりそうでもない。第一印象はかなり高いがその後関わりを持つ中でその美貌からのイメージと中身とのギャップがある。かなりフレンドリーで自身の美貌を鼻にかけないし結構話が合うと、数少ない友達でなかなかのナイスガイってとこだ

(……………今日の口説き相手はアリスか。まったく、頑張るねえ)

ハ「美味しいパフェを出してくれるところ、僕知ってるんだ。どうだい、甘い甘いパフェで僕と優雅な一時を……………」

ア「ごめんなさい。私甘いもの苦手なの」

(優雅な一時でパフェって……………やっぱアホだ)

アリスはそそくさ教室から出て行った。ハーレイが向こうから歩み寄り彼の席にドスンと座り、目の前の定位置に戻ってきた

ハ「ハア、今日もダメだったよ!」

「気にすんなよ。あいつ、異性になんて興味無いんだろ。毎度毎度よくやるよな、そんなことしないでクールにしてれば見てくれだけは完璧なのにな」

ハ見てくれだけってのは余計だよ、奏」

手を掲げ、自分に浸るシユート

「ははっ、こないだはナルシスト全開で挑んでたよな。ありゃあ確実に引かれてたぞ!」そんな他愛もない会話をしているところに訪

問者が

ア「あのねえ、しつこいの！」

アリスと

ヴ「そんなこと言わずにさ、俺とさ、明日さ、デートしようぜっ！」

ヴァンだった

（わざわざこのクラスまで来たのかコイツ……御苦労なこった）

「どうした、ハーレイ？」

ハーレイは奏の肩をとんとんと叩いて注意を引いた

ハ「ヴァンさんってアリスのこと好きなのか？」

ハーレイはぼそぼそと小声で尋ねてきた

「どうなんかねアイツ」

低い調子でふーんと鼻を鳴らすハーレイを横に頬杖ついてアリスとヴァンのやり取りを見ている奏

（なんでアリスは教室に戻ってきたんだ、女子寮行けば男は入りづらいのに）

奏は後に女子寮が男がただ入りづらいただけでという甘い認識を変え、恐ろしさを知ることになる

ア「あのねえ、私にも予定つてもんがあるの！」

ヴ「予定ってなんだいアリス？」

ア「うゝ……その……」

回避の為の咄嗟の嘘に質問され嫌な汗を確認したアリス。その眼は宙を右往左往と泳いでいる

ヴ「なんだ、人に言えないような用事なのか。まさか………予定なんて嘘か？」

ア「そ、そそそんなことないわよっ！明日は………か、奏にいいもの食べさせてもらうのっ！！」

ヴ& amp; ;シ& amp; ;奏「……は？」「」

自分を名指しの唐突な嘘に頬杖していたひじをずつりと滑らせた奏

ア「お、おいしいパフェとか、洋服みたりするのっ！」

ハ「おいおい、さっき甘いもの苦手って言ってなかったか？」

先程否定されたハーレイの誘い文句をアリスは奏にOKサインを出している。そのことにツツコミを入れるハーレイだった

ア「だから予定があるわけよ、ヴァン、わかった？」

ハ「スルーかよ！」

ア「ほら、行きましょ奏！」

ぐぐいつと手を引つ張られ教室から消えて行く奏とアリス

ヴ「アリスが……アリスが……俺の名前を……呼んで……ヴァンだって……」

ヴァンはアリスに名前を呼ばれた事にニヤつきまくって、浮足立って教室からふらふら消えていった

ハ「まったく……」

一方奏とアリスは廊下を歩いていた

「なあ、なんであんな嘘ついたんだよ」

ア「あれを乗り切るにはああやって嘘つくしかなかったじゃない！」

「しかしまずいぞコレは……」

ア「なにがよ？」

アリスはまずいと言われたことを疑問に思い、奏に尋ねた

「……………恐らくハーレイとヴァンが確かめにくるだろう」

ア「確かめるって何を？」

「お前がさっき言ったことをだよ」

ア「つまり、奏と明日デートするって嘘を？」

「恐らくな。もし一人で街を歩いててみる、たぶんハーレイとヴァンが来てまた口説き始めるぞ」

ア「え、それはちょっと……でも明日買いたいものがあるのよね」
二人は再び廊下を歩き始めた

「ガーデンさんはどうなんだ？」

ア「明日は教師の会議があるみたいなの」

「ならマリー誘うとか」

ア「そうね。でももしたらあいつらが……」

「美女と美少女の女二人だけ。絶対口説きに来るな」

ア「もう、いいから奏も来てよ！」

「……………パフェは奢らんぞ？」

ア「やった！来てくれるのね！」

「今回はまあ仕方ないからな」

ア「じゃあマリー誘いに行きましょう！」

二人はそのままマリーのクラスへ向かった

ア「マリー、いるー？」呼びかけたが返事はない。つまり教室にマリーはいなかった

すると、そこにいた先輩女生徒がマリーは今日欠席していることを教えてくれた

ア「休みか……奏、寮へ見に行きましょう」

.....

ア「マリー、入るわよ？」

ノックしても呼びかけても返事無く、仕方なくアリスはドアノブに手をかけた

.....ガッ、ガッ.....

「鍵かかってるみたいだな。さてはマリーのやつ、サボりか」

ア「.....仕方ないけど明日は奏と二人か.....」

それを聞いた奏は少しムツとしたが何も言わなかった

ア「じゃ、また明日ね」

アリスはそのまま自分の部屋へ帰って行った

奏はいつ頃出かけるのか聞き忘れたことに気づいたが、聞きに行くのもめんどくさいので奏も部屋に帰った

D a t e、伊達、デート？

夕焼け。空一面が、見とれてしまうような夕焼け

海が見える。ここは街の中の海に近い公園

ア「……………今日は付き合ってくれてありがとね。すごく……………楽しかった！」

初めて見るアリスの満面の笑み。それはそれはとても可愛いものだった
いやホントに

ア「その……………今日私を楽しませてくれた奏にお礼、したいなっ」

アリスは顔を夕焼けに負けないくらい紅らめ、俯き上目遣いで奏をじっと見つめる

それも後ろで手を組み、体をもじもじさせながら

「……………で……………なで……………」

……………嗚呼、抱きしめたくならないかコイツめ。愛おしい。
実に愛おしいぞ。今日のアリスはおかしいくらいめっちゃくちゃ可愛い

ア「その……………目、閉じて……………」

……………嗚呼、閉じるのは僕の理性でもいいですよ？抱きしめて
もいいですよ？もう我慢しなくてもいいですよ？この可愛い過
ぎるアリスが悪いっ！小悪魔め！ロリロリめ！ツンデレめ！

一方アリスは目を閉じて唇を軽くだしている

……………！！

奏の中の何かが切れた。それは恐らく、歯止めとなっていた理性と
奏を繋ぐ糸

「……………なで……………か……………で……………」

奏も目を閉じ、アリスに抱き着いた。その瞬間、奏の体に殴られた
ような強い衝撃が走った

ア「なにすんのよ!!」

そんな怒声が耳をつんざく。そして奏が目をあけると

ア「…………ハア…………ハア…………ッ!!」

顔を真つ赤にして怒りの鉄拳を自分の腹に打ち落としていることがわかった。

何をされたかわかったところで、稲妻のように激痛が走る

「……………ッ!!」

痛い。かなり痛い。それこそ長いくだりで自慢のネタをやって、滑ってしまったあとの空気並に

ア「あんたって奴は……………起きて来ないから起こしに来てあげたのに!!いきなり!抱き着くなんて!バツカじゃないのっ!!」

「ん?夢ならいいじゃあ〜ん…………アリスう……………」

殴られてもまだ寝ばける奏はアリスを自分の元へグイッと引き寄せた

ア「わっ……………な、何すんのよお……………」

抱き着きの次は抱き寄せられて、男免疫の無いアリスは照れの頂点。しかも次はチューしようとしてるではないか！

パニクリ過ぎたアリスは、とりあえず殴った。殴りまくった。力の限り殴りまくった。ええ、そりゃもちろん奏の顔を

ア「なななななな何しようとしてんのよっ！！こ、これは正当防衛だからね！！」

(……………そうか……………これは夢じゃないのか……………)

やっと眠気が消えた奏は上半身を起こし、頭を掻きながら大きな欠伸をしている

ア「は、早く仕度しなさい！！もお何されるかわからないから外にいるわねっ！！」

ボタンツ！と、大きな音を立て嵐は部屋から過ぎ去った

.....

ア「今度あんなことしたらただじゃ済まさないわよ？」

もう十分殴られましたと言いたげな顔の奏。今は二人で街を歩いている

「ところでアリス。欲しいものってなんなんだ？」

ア「それはまだ秘密よっ」

一体何だろうと思いつつも深く聞くのもめんどくさいので止めておいた奏であった

それから少し歩いたところにあつた喫茶店にアリスが寄りたいたいと言
い出したので立ち寄った

ちなみに奏の金は屋敷にいる時にマリーから多少もらっていたもの

である

ア「奏、外のテーブルに座りたいんだけどいい？」

断る理由も無いのでもちろんと言って外のテーブルの、アリスが座る椅子を引いた

ア「あら、案外気が利くのね」

「その辺は俺だつてわきまえてるよ」

アリスはくすつと微笑んだ

「なんだよ、笑うことは無いだろ」

アリスは紅茶を注文し、少しすると紅茶が運ばれてきた。外テーブルに居ても、とてもいい香りが鼻まで漂ってくる。後日談だところこの喫茶店は味にも外見にも評判のある結構有名なところらしい

奏は辺りに建て並ぶ店を物珍しく見ると一つ気になる店を見つけた

「なあアリス、後であそこの店行ってみてもいいか？」

ア「後じゃなくて次でいいわ。どんな店気になったの？」

奏が指差す先にあった店、それは古びた骨董屋のようだった。

アリスが紅茶を飲み終え、喫茶店を出てすぐ骨董屋に向かった

ア「ふん。奏ってこういうのに興味あるのね」

「何て言うか……惹かれるんだよな。たぶん俺だけじゃなくて男ならそうだと思うぞ？」ア「そうなのかしら？どこかの御曹子とかお偉方と出かけたときはお菓子や紅茶を深く味わったり、馬を嗜んだり、湖の周りを散歩したり、ドレスや魔法石買ってくれたりとかだったわ」

（魔法石とか次元が違い過ぎる……………）

そんな奏は骨董屋の前で店をまじまじと観察してみた。外見はただの古びた骨董屋だったが、奏には何か感じたものがあるらしく目を輝かせている

ア（古臭い物に興味持つなんて奏ってやっぱり不思議な人ね）

外見から既に楽しんだ奏はつきつきしながら店の中へ入っていった

「……………っ おお！！」

つい声がでてしまった奏。骨董屋の中はところ狭しと言わんばかりにもので溢れていた

ア「ここ、店の外見のわりには案外品数が多いのね」

？「こんな店で悪かったわね」

店の何処からか声が聞こえてきた。声からすると若い女という感じがだ

ア「失礼。店の主かしら？」

？「そうよー。逆にあなたは客でいいのかしら？」

奏はいつの間にか店の奥へ行ってしまうていた

ア「ええ。できれば姿見せてくれると有り難いんだけど」

すると後ろから肩を叩かれ、アリスが振り向くとそこにはローブを着た人が立っていた

？「いらっしやい。私は店主のククリよー」

そう言いローブのフードを脱ぐとそこには、ピンク色の緩い巻き髪の毛、顔は女性というよりは女の子の感じがする店主だった

ク「こんな接客でゴメンねー。こんな店やってるから冷やかしも多いのよ。でも女の子がお客さんなんて久々で嬉しいなー！」

ア「私はアリス。よろしくね。あ、客は私じゃなくて連れがいるんだけど、そっちなよ」

アリスが奏の名を呼ぶと返事と共に店の奥から奏が現れた

「何かあったのかー、アリス？……………ってその人だれ」

ア「ここの店主の…………」

ク「ククリよ。お客さん、なんか気に入ったのあった？」

「ああどうも。ちょっと待っててくれ」奏はまた店の奥に消えて行った

ク「あれ、アリスの彼氏なの？」

ア「ちょ、ちょっと！なんでそうなるのよっ」

ク「勘」

ア「奏が彼氏なんて……………」

奏が彼氏だったらどうなるか想像したのかアリスは首をふるふる振っている

ク「その調子じゃ、まんざらでもなさそうね。アリス」

ア「ちよつとあなたねっ！」

ク「ふふっ、冗談冗談っ」

アリスはククリを睨み、ぷくーっと頬を膨らませ唸っている。美少女にやらせるとなんでもかわいい仕草だ

「あ、おーい！これこれ！」

ガシャガシャ音をたてながら奏が持つて来た物、それは箆手だった。しかも美しい彫刻が全体に彫ってあり錆やら傷やらでボロボロにはなっているが、何かを感じさせる代物である

ア「奏、これボロボロじゃない」

「たしかにボロボロはボロボロなんだが、何かを感じる……………」

ク（ふ〜ん……………なるほどね）

ク「お客さん、それは挨拶の印にただであげるよ」

「ホントかつ!?!」

ククリは頷き、そんなボロで良いならねと付け足した。まったく、太っ腹な店主だ

ア「なんか悪いわね、奏の為に」

ク「んっ。これからも御贔屓にねアリス、奏」

そして奏とアリスはククリに礼をして、店から出て行った

ク「やっと、現れたよ……………」

ア「……………じゃ、今度は私に付き合ってね」

「もっちゃん！」

奏とアリスはゆっくり歩きだした

「そろそろ何買うのか言ってもいいだろ？」

ア「そうね。実はパンを頼んだのよ」

「パン？」

「ええ。知る人ぞ知るっていう一部にすごい人気の美味しいパンを予約してたのよ」

ふんふんと頭を頷かせる奏。アリスが買う物がパンだと言うことが意外だったらしくなかなかの興味を示している

ア「で、そのパンはね……………」

アリスはパンについて語り始めた。普通なら適当に相槌を打って聞き流すが、奏自身パンが好きなのでアリスの話に耳を傾けている

ア「あ、あそこよ。奏」

アリスの指差す先には確かにパン屋らしき建物があった。行列は無いもののなかなか客が出入りしている。知る人ぞ知るところより、普通に人気のあるパン屋といったところだった

アリスはパン屋に入り、奏は他の客の邪魔になるのが嫌ということで店の前に待つことに

パンを買うだけにしてはなかなか遅いので、奏が店の中へ顔を覗かせるとアリスは店の人と客と話していた

（あいつめ……………待ってる俺の存在忘れてるな……………）

ア「ゴメンゴメン、話がついつい長くなっちゃって」

「……………ったく、こんなの今回だけだぞ」

あれから一時間以上待たされた奏であった。今二人がいる場所は海に近い公園。そしてその公園のベンチに並んで座っている

ア「ゴメンねっ。でも……………今日は楽しかった!」

アリスはベンチにパンを置いて、奏に向かい合うようにして立ち上がった

アリスは後ろで手を組み、座っている奏を見つめる

ア「今日一日付き合ってくれてありがと。繰り返すけど、すごく……………楽しかった!」

(あれ?なんか見たことあるような……………)

ア「奏の事少し知れたし、よかった」

(よくわかんないけど……………これってデジャヴ?)

アリスは海の方へ体の向きを変え、つま先立ちになるくらいの伸びをしてから一息置いて呟く

ア「綺麗……………」

夕焼けで海一面が淡い紅茶色になって輝く。今この海の水を飲んだら美味しいかもしれないなんて錯覚を不意に起こしてしまうくらい、美しかった

奏は無言でベンチから立ち上がってアリスの横に立ち、それから暫く二人はこの美しい景色に目が離せなかった

肩が触れそうで触れてない微妙な立ち位置の二人。傍から見たら恋人同士だと思われても不思議じゃない雰囲気まで二人の周りには漂っている

「さて、そろそろ行くか」

ア「そうね……………」

アリスはまだこの景色を見ていたいようだが、日も落ち気味だから少しばかり寒くなってきたので、仕方なくアリスはベンチに置いてあるパンの袋を抱き抱える

そして二人は現在の家である生徒寮へ歩きだした

ア「また見たいね……………」

ゆっくりまったりほっくり

じめじめして薄暗い、蝋燭の微かな明かりにだけ照らされている部屋
冷たく堅い石畳が敷き詰められていて、その床には魔法陣が描かれ
ている

そんな黒魔術の儀式に使われそうな部屋に魔術師が着ている真っ黒
のローブ、年代物のシワの刻まれた大きな杖を右手に持った人影が
入って来た

「……………とうとう現れました……………」

ぶつぶつと呟くその人影の左手には蒼い宝石が握られており、その
宝石を魔法陣の中心に置き、宝石の上に杖の先を落とした

ローブのフードを脱ぐと中から美しい桃色の髪が現れた

「……………一族の誓いを、私が果たす事になりました……………」ま
たぶつぶつと、今度は呪文を唱え始めた。すると魔法陣が輝き、口
ーブと美しい桃色の髪が靡く

杖を上に掲げ呪文を唱え、杖を宝石に突き刺した

すると部屋が魔法陣の輝きにより一気に蒼く明るく、しかし大きく
大気が揺れる

「……………ッ！！！！！」

いきなり宝石が光り輝き、部屋を飲み込むように強く光を放った…
……………

〈奏の部屋〉

「今日も休みだが何しようかなー」

ベットに横たわっている奏。部屋は昨日の買い物によって少し景色
が違う。そして景色を変えてる物の一つ、昨日ククリの店で貰った
モノを手にとった

「この箆手……不思議だよな……………」

自分の前に掲げまじまじと見つめる奏。確かに箆手の、その古びた
外見からは不思議な雰囲気醸し出している

「んー、嵌めてみつか」

両手に嵌めてみてわかったこと。それは

「も……………モフモフや……………」

古びた外見からは考えられない、とても柔らかい毛皮のような感触が奏の両手を包みこむ

「しかもかなり軽いし動きがしなやかだ……………」

嵌める前の重さはなかなかズツシリしていたのだが嵌めてみるとそれは全く感じさせない、嵌めていないと言っていいくらいに軽く、指も動く

奏はベッドから起き上がりシャドーボクシングを始めた

シュツシュツシュツシュツ……………

小刻みに拳を繰り返す。

シュツシュツシュツシュツ……………

ノリノリで拳を繰り返す。

シュツシュツシュツシュツ……………

「ふふふ……………俺は最強……………俺は最強……………これならマリーにも余裕で勝てる……………打ちのめして俺に従えてやるぜ……………ふふふ……………ッ!」

不意に部屋の入り口、ドアの方から嫌なオーラを感じた奏。シャドーボクシングにノリノリすぎて気づかなかったが、そこにはマリーが居た

マ」……………」

マリーは無言だ。このどす黒い、蚊を雰囲気で殺せそうな、この嫌なオーラは恐らくマリーにしか出せないであろう……

「や、やあマリー、い、いらっしやっい」

マリーは反応しない

「そ、その椅子にでも座っててくれ、お茶だから……」

マリーは反応しない

「ま、まりーすわぁん……」

マリーは反応しない

奏は籠手を外し棚に置き、ゆっくりつま先歩きでマリーの裏にあるドアへ向かった。終始マリーの視線を感じる奏だが、そこは気にしないようにしている。が、冷や汗が止まらない

そしてドアノブに手をかけ部屋を出る瞬間、それは叶わぬ夢となったマ」……………」誰を従えるですって？」

ビクッと固まる奏。それをよそに続けるマリー

マ「私を従えるなんて……………100年早いわよ!」

「ヒイイイイイイイッ!……!」

ドスン。ドスン。と形容したらいいだろうか、鉛のような重さの霧
囲気を纏ったマリーの両脚が奏に一步、また一步とゆっくりとしか
し確実に近づいていく

一方の奏はというとマリーのその威圧感に恐怖し、泣きそうなま
でに引き攣った顔をしながら一步、また一步とマリーの両脚が近づ
くに合わせて尻餅ついたまま後退る

そのとき、ドアの開く音が耳に入った。奏の部屋のドアを開けた
のはハーレイだった

彼の眼に飛び込んできた映像は若い男女がくんずほぐれつでいて、
しかも女性が知り合いの男の両腕を押さえ付け上に股を開いて乗っ
ているではないか

健全な若者がその状態を見て何も思わないはずがなく、彼もまた何
かを感じ取り、知り合いの男の部屋のドアをその顔に笑みを浮かば
せながら静かに閉じた

「……………チクショウ」彼が扉の向こうでそう呟いた

一方の二人はというと突然の来訪者に驚き、マウントをとったまま
暫く固まっていた。そんな中、先に声を発したのはマリーだった

マ「見られ……………ちゃったね……………」

少女は頬を朱らめ、自身の両手でその頬を隠すようにおおった。「てへっ」という仕草もセツトにして

「何が「てへっ」だよ！絶対勘違いされたよ！明日気まずいじゃん！そして俺の上からどいてよ！」奏は解放されている両手でマリィを軽く押し退ける。あくまで軽くだったのだが自分の世界にトリップしている隙だらけマリィの体勢を崩すには十分すぎ、そのまま後ろに倒れ込み今度は奏がマリィを襲う形になってしまった

ちなみに奏が押し退けるた部位は肩であり、決してたわわに実った悪魔の果実もとい円周率に使われる俗称記号の名前に似ているモノではない

「あっ……………ゴメン……………」

マ「……………うん」

押し倒された体勢のマリィは顔を更に朱らめ恥ずかしそうに頭を横に向けた。まるで初夜を迎える少女のように

「マ、マリィ……………その……………」

マ「……………なあに……………？」

顔を奏に向け、かわいらしく聞く。美が付く少女がやるととてもない威力である。例えるなら官能的な状況で鼻血が垂れて来てしまふなんて古くから使われている表現を地でいけるくらいのかわいさ。そんなマリィに奏がかける言葉はというと

「気持ち悪い」

だった。さすがのマリーでも奏の遙か斜め上をステルス機で駆け抜けるが如く反応で口を開けてそのまま啞然としてしまった

「いつものマリーからこんな姿作るのはいくらなんでも無理があるぞ……」

マリーはというとケロッと表情をいつもの明るい顔に戻し奏に向き合う形で体勢を立て直す

マ「やっぱり私にこういうのはダメかなー？」

頭を縦に振り二言返事で返す奏。更にこう続けた

「いくらなんでも唐突すぎるよ。他の男なら一発ノックアウトだろうけど……で、今日は何の用なのマリー？」

さっきのアレが全部演技だとするとかなりの悪女を演じれるほどの技量であった。そしてマリーは奏からの問いに応えた

マ「今日は買い物行くわよ。それよりその箆手はどうしたの？」

マリーは奏の肩まですっぽり覆っていた古傷だらけ、しかしもふもふの細身の箆手に注目し尋ねた

「昨日アリスと街に出てね、その時貰ったんだ」

マリーはふーんと鼻を鳴らし、その場に立ち上がり奏を催促する。奏は呼びかけに反応し立ち上がった

「で、買い物って何処行くんだ？」

マ「まあついて来なさいなー、奏くんっ」

奏とマリーは学園を出て街へと向かった。

街は学園から歩いて10分ほどと、かなり近い。生徒達も気軽に、そしてすぐに行けるときて街には若い人間も多く今日も休日も相成って俄然活気に溢れていた

コツコツコツ。街中で靴底と石畳の狭間で小気味良い音を躍り鳴らしている中に二人も歩いていた

「なあマリー。街についたしそろそろ何処行くか教えてくれよー」

奏は頭の裏で手を組み、自身の隣を歩くマリーにぶっきらぼうに投げ掛ける

マ「そうね……今日は私の知り合いがやっている鍛冶屋さんに行くのよ」

「鍛冶屋？」

マ「そう、鍛冶屋。あなたってば魔法使えないじゃない、だから護身用にいろいろ作って貰うように頼みに行くの」

「ふーん。でも魔法相手じゃあんまり意味無いんじゃないか？」

マ「ふっふん。奏くん、今から行くのは私の知り合いの所よ？」

豊満な胸を反らし自慢気な口調で鼻を鳴らすマリィ。奏もそれに納得し軽く二、三度頷く

それから暫く歩き住宅街、商店街から少し離れた工業地帯へ着いた二人。この街「レイシユノット」には川「リヴァイバル」が通っており、その川が住宅・商店街と工業地帯とを二分している。この川の名には由緒ある由来があり、その昔、この地にあつた街がモンスターの大群に襲われ壊滅的状况に陥つたさい、一人の戦士が訪れたそう。

その戦士は剣士であり、剣を抜き、一振りするだけで百以上のモンスターを消したらしい。

そして一日とかからず街を壊滅的状况に追いやつたモンスター達を殲滅し、民を助けた。その後には彼は懐から一つの石を取り出し大地に落とすと、それは遥か彼方まで届く光り輝く一つの道を造り、それは輝きを無くすと水の道に変わったそう。

街の長が礼を告げる前に彼は去つてしまい、そしてその水の道は民に潤いを与え、街を建て直すために必要不可欠であつた。いつしかその水の道を民は復興・復活の意を込めて「リヴァイバル」と呼ぶようになったそう。

そうマリィが教えてくれた。マリィによるとこの地域に古くから伝わる伝説らしい。これが真実かどうかはわからないが。

マ「ほら、着いたよー！」

マリィが指差す先には周りにある建物より一際大きい建物がこれでもかというほどに存在感を示していた

中からは外にいても十分に聞こえる程の怒声が幾つも耳に張り付く。

一步入るとさっきまで感じなかった熱気がぶわっと体を包み、職人達から発せられてる怒声も更にひどく耳につく

そんな中、マリーは慣れた様子で奥へ進んで行く。奏が遅れてマリーの背中を追っていくと鍛冶場の一番奥には一つ渡り廊下があり、どうやらその向こうにマリーの知り合いという鍛冶職人がいるらしい

渡り廊下にでるとさっきまでの熱気は何処へやら、辺りを見回すと大きい庭の中に渡り廊下と屋敷が存在しているとわかった庭は日本庭園に近い形で、

かなり手入れされているらしく見栄え良く整っている

渡り廊下を進むと大きい二階建て屋敷が一軒。これまた趣のある屋敷であつた

屋敷の中から何かが聞こえることに気付いた奏。耳を澄まして聞いてみるとそれは楽器の音色だと聴いてとれた。恐らく弦楽器だろう。とても美しい旋律で素人の奏でもかなりの腕前だとわかる程に巧い。ついつい奏はその美しい旋律を立ち止まって聴きこんでしまっていた

マ「ヴォルフイ、中入るわよー？」

マリーは掛け声と共にずかずかとヴォルフイと呼ばれた人物の屋敷へ上がり込んでいて、マリーの声でやっと奏は美しい旋律の世界から放たれた。そして慌ててマリーの後を追った「お、おいマリー。勝手に入っていいのかよ……」

小声で問い掛けるがマリーは頷き、それだけで奏の問い掛けを済ませてしまった。彼女はもう一度この屋敷の主のらしい名を呼ぶが返事は無い

彼女は屋敷の中を我が物顔で進む。どしどし進む。幾つか部屋を覗くが家主は見当たらないので、二階に行くことに。したらば旋律がさつきよりもはつきりと聞こえることから、二階にいることは間違いなさそうだった。

マ「あ、いたいた。ちゃんと返事してよねヴォルフイ」

マリーは家主を見つけたらしく、先程の呼びかけに反応が無かった事に不満を漏らしている。家主は楽器から一旦離れ、その場にすつと立ち上がった

ヴ「いやぁ申し訳ない。すっかり世界に入っちゃって気づかなかったよ」

照れ臭そうに頭をかきむしる。家主はいつもの来客とは違う存在に気づき、振り向くと握手を求めると同時に挨拶を交える

ヴ「はじめまして。この屋敷の主、そしてこの街の鍛冶職人をまとめる「ヴォルフイーレ・ラリイ・フットガル・ストリーシェ」です。私の名は長いからね、彼女みたいに略してくれて構わないよ」

ニコリと優しい笑顔を向けてくる。まるで親が子を見るように。奏も家主に自己紹介し、一礼した。緊張のせいか物腰はすこし固い

ヴ「昨日言ってた例の彼だね、マリー？」

ヴォルフイーレがマリーに目配せするとこくりと頷き返した

マ「じゃあ、今からお願いね」するとヴォルフイーレは奏に服を脱

ぐように指示した。どうやらサイズをピッタリにするため今から採寸するようだ

胸寸を測るヴォルフイーレの頭が奏の間近に、ほのかに香る匂いは微かに甘い。ヴォルフイーレの容姿、それは美をそのまま具現化したような、完璧としか形容の方法が無いほど。そんなヴォルフイーレの白銀の、すこし長く伸ばした髪からひよこつと飛び出しているものが二つ。位置からするとそれは耳のようだ

「あ、あの……………」

ヴォルフイーレのひよこつと飛び出している耳、それは人間のものにしては長く、尖っている。不思議がる奏はついつい疑問の声を漏らしていた

ヴ「ああ……………僕はエルフなんだ」

自身の耳に対する奏の疑問にそぐわないようにそう答え、視線は上げずもうすぐに終わるであろう採寸を続ける

「人間以外の種族を初めて見ました……………」

ヴ「まあこの街は比較的種族にオープンだからいろいろいるけど中でもエルフってプライドが高いからね、あんまり人間と一緒に居たがらないんだ。人間はこの世界で最弱卑怯の種族、エルフは狩りにも叡智にも富んだ高等種族、ってね。私はいろいろと人間と付き合っている間に良いところも十分に知ってね、だからあんまりそういう意識が無いんだ。エルフにしては珍しく、人間の世界で住んでいるんだけどね」

大まかに自身の種族について奏に説明し終えたと同時に採寸も終わり、ヴォルフイーレは全身を採寸して得られた数値を紙に書き留め、まとめた。着替えを済ませた奏達と一緒に紙を持って一階へ降り、一階の一番奥にある小さな自宅鍛冶場へと向かった

ヴ「じゃあ早速取り掛かるとしよう。マリー、悪いけど奏くんも連れていつも通り向こうで寛いでいて欲しい。そうだね……30分もかからず終わらせるつもりだから居間にでも居てくれると助かるよ」

そう言い残しヴォルフイーレは鍛冶場の火をつけ、早速作業に取り掛かる

マ「じゃ、お言葉に甘えさせてもらって向こうで寛ぎましょー」

奏の肩を後ろから押す形で、ここにくる途中にあつた屋敷の居間へぐいぐい押しやるマリー。居間へ着くなり奏を屋敷自慢の大きなソファに座らせ、慣れた手つきでお湯を沸かし紅茶を煎れる

マ「最近どうなの？」

ソファーに腰掛け、紅茶を口に運びながら近況報告を求めた

「どつて？」

霧のような、あまりにも抽象的な質問なので逆に問い掛ける形に

マ「そりゃアリスとかアリスとか、アリスとか？」

「アリス限定……しかもなんで疑問形なんだよ」

ティーカップで口元は隠れていて確認できないが目元を見る限りマリーがニヤニヤしている様子が取って解る

「アリスとはなんもねえよ。期待に応えられなくてすみませんねえ」
マリーはふぐんと鼻を鳴らし、更ににやついている。奏はそんなマリーに何か嫌な予感を少なからず感じていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2154/>

Roman holiday

2011年11月11日12時36分発行